

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十五卷 第十一号

昭和三十三年四月十五日 第三種郵便物認可
昭和三十一年十一月一日発行
昭和三十一年十月二十五日印刷
日本国特許庁特別授業認雜誌第六八三号
幼児の教育 第五十五卷 第十一号 (毎月一回一日発行)



子

日本幼稚園協會

11



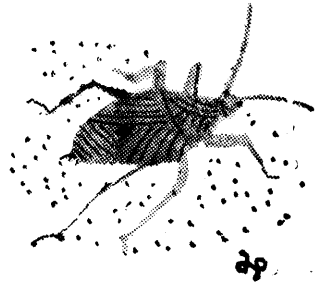
幼児の教育 目次

第五十五卷 十一月号

表紙 堀文子

実存主義と教育……………	藤田健治…(2)
遊びの心理について……………	波多野完治…(6)
幼児の生活指導……………	松村康平…(10)
一年保育と二年保育の問題とその八……………	山村きよ…(15)
三年保育の経験と観察(アンケート)……………	小林操・土屋真砂子・川崎千東 原田春子・阿部伊都子・元木正子 堀合文子…(18)
四才児の器楽指導……………	堀合文子…(32)
「童話化」について(5)……………	本田和子…(34)
「昔話とこども」に見られる時代の推移……………	室谷幸吉…(40)
自然保育の実験報告……………	目白幼稚園…(44)
幼児の言葉からうまれたうた(3)……………	鈴木正子…(48)
母親は幼稚園教育に何を期待するか……………	岸本弘…(50)
幼児教育における個性の考え方(2)……………	岡田正章…(55)
幼児の知能の研究(8) 知能の診断……………	村山貞雄…(59)

編集主任 津守 真 編集主任 齋藤文雄 編集主幹 及川ふみ 協力委員 牛島義友 波多野完治 山下俊郎 (五十音順)



実存主義と教育

藤 田 健 治

私は平素大学教育に携わっているものですから皆様のなさっておいでになる幼児教育については何も解らないという方が適當だと思えます。然し学生を対象とするのと幼児や児童を対象とするのとでは大変違いながらも、又教育という点で共通の面もある事は確かです。それで今日はその教育全般と私の専攻しております哲学との関係からお話を致してみたいと思えます。

さて私共が教育という仕事に携わって被教育者を取り扱っていくにます時、教育に対して強い信念をもって事に当らなければならぬのは勿論ですが、そうかといってまた私共のもっております考え、私共が自分の育った環境や自分の受けた教育から受けとり、又自分の経験を通して得た人間や社会についてもっている考えを、無理に被教育者に押しつけるというようなことは避けなければならぬと思えます。それは申すまでもないことですが、子供達にはそれぞれ個性というものがあって独自の発達をしていくものであり、それは

それなりに皆立派な人間になるというのが大切であって、教育者が自分という人間を子供に押しつけ、子供を自分と同じような人間にしてしようようなことはおかしいことだからです。然しそれならば私共は教育に携わっている間に何もそういった人間観や世界観をもたずにやっているかという点、それはそうでないようです。

例えば子供のうちには大変積極的な実地的な元氣な子供、指導性があり強い子供がおります。そういう子供はそれなりに立派になっていくように伸ばしてやることは大切であります。そうかといって自分勝手な気持で他の子供のことは余り考えずに自分の考えを押しつけ、クラスをひきまわすいわばボスの人間になっては困ります。従って他の子供との協調的な面も伸ばすように考えてやらねばなりません。或は又逆に内攻的な引込み勝な、何かという他人を頼りたがる子供もおります。こういう子供は内面的な深さが伸びて行くようにしてやることは大切でしょうが、又多くの子供の中で交わっ

てやはり自分の正しい主張はおそれずに出来るように指導することが必要でしょう。こういう指導がどうして出来るかという点、それは教育者が暗にもっている人間像や世界像、およそ人間とはどうあるべきであり、人間の社会はどうあるべきであるかというイメージが背後にあつて、それが基になつてはじめて出来るといえるでしょう。つまり広い意味での人間像や世界像は誰でももっていますし、又それをもつていなければ教育することも実際は出来ない筈だということになります。然しこういう教育者が各自もっている人間像や世界像はそれぞれ違つておりましようし、それが適当かどうかという点も問題になり得るでしょう。そこに人間像世界像について考へている哲学が教育になつてきます。

教育哲学は戦後の日本の教育界ではあまり問題になつていないように見えます。それは一つの反動であつて、抽象的哲学的議論よりは実際の具体的な面が大変強くなつてゐるからです。それはそれとして大変結構なことなのですが、然しそれだからといつて哲学的面が教育に必要であることは忘れるわけにはいきません。そこで今いったような意味で哲学と教育との関係を知つて頂くために、現代哲学が人間というものをどんな風に考へてゐるかを申し上げて見ようかと思ひます。その場合現代哲学で大きな潮流となつてゐる実存哲学について申し上げて見たいと思ひます。

実存哲学という言葉とならんで実存主義という言葉もあります。勿論実存主義という言葉の方が広くて、それが哲学に現われれば実

存哲学ですし、文芸に現われれば実存主義の文芸というわけです。然し実をいうと実存主義は文芸よりも哲学の方がさきでした。例えばフランスにおける実存主義の代表者としてサルトルとか女の人でボーボアルという人がおりますが、彼等は哲学の畑から出ました。ことにサルトルは大きな哲学の書物もかき、立派に哲学者としても通る人間です。そして実存主義の文芸の出る前に実存哲学は世に出ていました。ですから実存主義は本来実存哲学として生れたといつてよろしいのです。

さてその実存哲学でいう実存とは何であるかと申しますと、実存という日本の言葉は現実存在するものといふところから出たのでしようが、外国語でいへば *existence*、エクジステンスで、本来はただ存在という一般の意味の言葉でした。それを人間存在、特に個的な人間存在の意味に用いたのはデンマークの哲学者キェルケゴールでした。実存哲学はこの伝統を踏襲したわけです。ところで実存哲学の出発点は、私達二十世紀の人間はいわば皆自分を見失つてゐる。自己喪失をしてゐるということです。私達は皆大きな社会機構の中で生き仕事をしてゐるわけですが、その社会機構の中に捲き込まれて、ただ機械的に仕事をして人間らしい悦びを感じてゐない。まるで人間自身が仕事の機械が道具のようになって、仕事に追ひまわされてゐる。チャップリンにモダン・タイムズという映画があるのを御存知でしょうが、あれはこういう仕事の奴隷になつて自己喪失をした人間を諷刺しています。仕事というものは勿論人間がつく

り出したものですが、それが人間を追いまわし支配している。同じことは機械文明一般についても言えます。例えば原水爆は人間が永い間努力し建設して来た科学の生み出したものですが、それがかえって人間を支配し、人間を脅かしている。こういう体験は誰にでもあるでしょう、毎日忙しく仕事を送り迎えている。そして毎日毎日暮れていく、がそれで自分はどうなのだろう。それでいいのか、それで自分は本当に生きがいを感じているのかと自分に問うてみるといった体験です。実存哲学はこういう風にして本当の自分を見失っているのが二十世紀の人間の生活だということです。然しそれではないのです。人間はもう一度自分というものを取り戻さなければならぬ。そしてその取り戻した本当の人間と人間との関係が人間の現在の生活の基本とならなければならぬ。この本当の意味での人間存在が実存とよぶものなのです。ではそういう実存、本来の人間存在はどうして得られるか。

実存哲学の最も優れた代表者であるスイスのヤスバースはそれに答えて、例えば古くから言われた「友を見出す」ということはこのような意味での実存関係であり、この関係のうちに真の人間存在があらわになると言っています。友達の発見ということはそう仰々しくいうまでもないやさしいことに見えます。然しそれは表面的な意味でそうなのです。本当の意味で無二の友を見出すことは決してそうたやすくはありません。東洋に「知己」という言葉があります、友達とは自分を本当に知っていてくれる人、そしてその相手にとっ

ても自分が又そうであるような関係、そうなつてはじめて第一義的な存在として人間同志が結ばれます。ペートオウエンの第九シンホニーの最後の歓喜の合唱の言葉はシラーの詩ですが、地上に於てわが魂とよび得る人をもつことの出来た人はこの歓喜の行進に加わることが出来るといっていますがヤスバースの言っているのもそういう意味のことであらうと思われます。こうして人間と人間との関係が本当に結ばれた時のあり方は、当然言葉の本来の意味で「愛」といえるでしょう。然し人間は夫々独立の人間でもありますから、やはりお互に離れた面もあり、一つにならぬ面もあるでしょう。その面をヤスバースは「戦」とよんでいます。すると人間と人間との関係は、愛しつつ戦い、戦いつつ愛していくことであるということになります。

「幼児の教育」の一月号でしたか及川先生のお書きになった農村の幼稚園のお話を私は興味深く読ませて頂きました。農村では農家は多く一つだけポツンと立っていて、近所隣りという社会生活がなく、又母親も仕事に忙しくて子供にかまっていられない。そういう社会性のない子供がそのまま園児になると、他の園児となじまないで幼稚園からいつのまにか脱けて帰ってしまう。それを先生の努力でだんだん環境になれさせ先生にもなつて来ると、こんどは先生を独占して離れない。もしこのことを例として申すなら、そういう子供に社会性をもたせてよい子供にしていくには、どこまでもその子供の気持になってその子供の人間性を眼覚めさせねばならない。その場合の教育者と被教育者との人間関係は愛の関係でしょう。然

し又その子供が他の子供を推しのけて自分だけの愛を主張する場合には私共はその子供をただ愛してばかりはいられないでひき離さなくてはならない。それは戦の關係になる。そうかといって何も愛がなくなつたわけではないのだから、愛しつゝ戦い、戦いつゝ愛するということが人間と人間との真実な關係ということになります。

もう一つ実存主義の人間觀について申して置かねばならぬことがあります。実存主義は人間理解に於て人間を合理的にとらえていくことに決して反対しませんが、然しそれだけで人間が根本的にわり切れるという考えをとりません。人間をつきつめていくといつても最後に剰余があり、つきつめられないものがあると考えています。私共は教育に於て被教育者を出来得るかぎりはつきり知らねばなりません。そこに教育心理学や教育社会学、或は生理学や医学の面までも大切であることは申すまでもありません。然し同時に私共は人間を概念的にこうときめて、そういう風にわりきると本當の人間の核心をのがしてしまいます。例えばさきほどの友達、本當の友といふものを考へてごらんになると解ります。その友達が本當の友達になるにはその性格としての特質や人間としての美点も色々あげられるでしょう。然しどんなに言い現わしてもそれで言いつくせぬよさというものがあつてはじめて本當の意味での友達でしょう。人間はそういうわりきれぬものだからお互につきざる愛情の対象ともなるのでしょうし、そういう人間を対象にする教育が最後には教育者の人間といふ必ずしも合理化出来ない問題に當面する理由ともなるので

しょう。こういうと実存主義は不可知論や神秘主義たという誤解がおこります。然し実存哲学は人間の合理的取扱ひ方を決して否定しているわけではありません。むしろそれを極度におしすすめた後にはじめてわりきれないものがあるということが解るといっています。

さて以上のような本當の人間と人間との關係は社会のあらゆる場面において出て来べきものであります。然しそれが一番行われやすい場所は教育の場ではないでしょうか。教育の場において最後に事を決するものは人間と人間とのふれ合ひでしょう。そこでは教育者も被教育者も本當の自分をあらわにします。又それなくては本當の教育は出来ないでしょう。ヤスバースのいう本當の人間と人間との間の実存的關係は実は教育の場での日常の事であればならぬはずです。然し私共も時として本當の自分を見失うこともあります。ただそれに対して教育者は普通以上に敏感であるのは教育の世界が社会の一部といわれますが必ずしも同じ利益社会ではなく或は少くともそうあつてならぬことを立て前としてゐるからだと思います。

以上が実存哲学と教育との關係についての私の私見です。私は今教育者と被教育者との間の人間關係だけについて申しました。然し被教育者相互についても実存關係はなり立つわけですし、又それになりたせざる教育やその教育方法というような問題も当然起ると思ひます。私は寡聞にしてそういう試みがあることを知りません。然し教育学の關係の方々が当然お取上げになつてよいものように思われまふし、私は又それを期待します。(お茶の水大文教育学部長)



遊びの心理について

波多野完治

「幼児のあそびの心理」。最近の幼児心理の傾向について話を少しして、あとの半分位をその傾向と関連させて遊びの心理について話をしたいと思います。

現在幼児心理の領域で大変大きな革新が起ろうとしています。というのは、ソ連の幼児心理学が発展して来ているからです。今までの幼児心理は、大体においてアメリカ風の幼児心理でありました。

これは、こまかい観察に基づいた幼児心理で分析を余りやらず、もっぱら観察に基づいて幼児心理を発展させてまいりました。この傾向は、子供が何才位のときは、何をするか、どういうふうにするかはよく教えてくれるがどういふわけでそうなるのか、ということや、また、もう少しこういふ風にしたいが、それは良いのであろうか、悪いのであろうか、成功するかどうかの見当をつけるのに困ります。グローバルの観察は環境的条件、家庭の経済的条件等の条件と幼児との関連は、法則化するが、どういふわけでこのようになるか、あまり教える事がありません。要するに幼児は発達するのだと

いう事になります。つまり発達という事実そのものをア・ブリーオリに予定するのです。

これを補う為に説明の原理、フロイド派の精神分析があります。これは人間の精神生活の発展を仮説でわりきる。このために種々の事が起つて来ます。例えば、三才〜四才に反抗期があります。反抗期の存在は観察すれば分る事ですが、それがなぜ起るか。これをエディップス・コムプレックスが働いて、反抗期が起るといふ風に説明するのがフロイド学派の考えであります。

一般的にいふとゲゼルの現象的なものを精神分析でおぎなうのが今までの幼児心理学である。

問題は、この二つの傾向が幼児心理をたてる上に良いかどうかということになる。ソ連の立場では二つとも充分でない。もっと新しい立場をたてたいと考えた。そうしてその考えがヨーロッパ中に広まって来ましたか数年のうちにアメリカにも広まり、幼児心理学の革新が起ると思われまふ。ソ連ではゲゼル風の考え方は、幼児心

理にならないと考える。ある家庭的の条件があると、子供はどのように変わるかは、教育学としてはそれで良いが、心理学の法則としてはある外的条件が子供の心理の内的構造をどういうふうに変化させるか、これからのような反応を起していくか分らなければ科学とは云えない。子供は外的環境のみで作られるものではない。外的環境は、内的環境に転化し、その内的構造の為精神構造を変化している。外的なものとの内的なもの相互交渉をみなければ、子供の心をとらえられない。ゲゼル式のもの、機械論的なものであるというのであります。またフロイドの学説を觀念論という。しかし、私の立場から云うと、觀念論でも唯物論でも要するにその学説によって科学的に子供を解明できるかどうか問題である。

フロイドのものは都合が悪いとわたしはおもう。と云うのは、フロイドの考え方は人間の主観的狀態感情の生活はわりによくとらえる事が出来るが、知性の生活をとらえる事が留守になりがちであります人間が本當の生活をしていくためには知性を働かさなければなりません。フロイドには快樂原理と現実原理という説がある。

快樂原理は子供が生れた時もっているが、現実原理によりしばらく。この現実原理が人間を社会的に仕上げていきます。この考えによりフロイドのものがよいとは云えませんが、よほどおきないにはなるとおもう。フロイド主義を幼児に適應する人々は、欲求不満をみるため、感情を重くみることにしこの欲求不満の解消ばかりを考えるために知性が留守になります。世の中の社会生活、物質生活の二つを通して子供が適應をやっています。この適應は、単に

一方的に環境に対して適應するのではなく、子供が、それとは逆に向きをかえて自分で考えたり父母に働きかけたりする方向があります。適應が充分に出来ないために欲求不満が起ります。すなわちフロイド主義は幼児の一番大切な働きは何であろうか。どのように伸ばすかについて、価値の転倒(十の価値に八とおいたり、又その反対を置いたりする)が起っているのではないか。これが、ソ連の考え方であります。フロイドの立場は性本能、攻撃本能に重点が置かれている。性本能が重視されることは幼児の精神生活において基本的なものであるが、幼児の場合、はたしてこっちの方が一番重いといえるかどうか。知性のはたらきの方が大切なのではないか。このような面の転倒が起ると教育にもひびくし、又幼児の精神生活の理解は、ゆがんだものになるゆえフロイドの学説はとれないのです。

ソ連はどのように考えるかと申しますと、二つの基本的な点があげられます。第一に幼児の精神生活は生れた時から、社会的なものだということです。

一般的には幼児の精神生活は自己中心性を基本的性格としてとらえています。この考え方はソ連の考え方はとりません。社会的なもの、現れ方は発達により変わってきます。赤ん坊が生れたときは泣く表情は間違える事がないくらい表情的であります。赤ん坊の泣き声一つをとっても社会的表現の一つである事は疑うことはない。ソ連の学者やフランスの学者は考える。更に子どもが大きくなると家族関係を意識してくる。この時代はフロイドの方ではエディプス・コンプレックスを意識してくる時代で、面白い行動をやる時代

である。ソ連に近いフランスのある学者はこの時期をComplexの時代と云っています。この時代において父母を意識する社会的なものが発達します。幼児は、これに反抗します。しかしその反抗の結果として社会性が生れて来ます。

第二としては、感覚の優位・感性的優位でこれは幼児心理学ではない。正統派の実験でいわれた事と同一であります。幼児は感覚的であります。これは幼児においては感覚を求める方向をとります。そして、何だろうという、物をさぐる気持ちに転回します。これが探究反射です。感覚の追求は人間を感情生活におぼれさせます。この時代の精神生活は感情的主観的であります。しかしこれは幼児に本質的であるかどうかは分らないとソ連の学者は考えるのです。外の物を認識する力を適当に導いていけば外のものをつかむのがはつきり出てきます。もう一つの点は従来のもので幼児が感覚的であるがゆえに言葉と結びつける事は、重要視していなかったのです。しかしソ連の心理学では幼児の感覚とともにコトバを重大視する点であります。

三才と六才は第一信号系の優越において第二信号系が発達してくるのが特徴であります。幼児の言葉は生々としていますが、大人の第二信号系すなわち言葉は意味だけがとり出され、生々した感情内容の方は摩滅されています。幼児は第一信号系にそのまま結びついていた第二信号系(言葉)を使っています。この事が大切なのです。

感覚の基礎の上に言葉をよく見ていく事はソ連の心理学の大きな功績であります。今までの幼稚園・小学校によくいわれた事は為す

ことにより学ぶという事でありました。要するに言葉はどうでも良かった。環境の良い子など言葉が発達していますがこれは今までは別に知能がのびている事とは無関係に考えられていました。一々千迄云えたとしてもそれをつかめているわけではありません。が、二・三の数の体系が結びついて数についての第一信号系と密接になって発展していれば知能がそれだけのびています。今までは言葉を軽視していました。これはブラクマティズムの偏見であります。

今後幼児の指導をする場合、今までもよりも言葉を重視しなければなりません。幼児の思考がのびるために言葉を上手に使用させ論理的なものを導いていく必要があるのです。言葉だけを上手にするのは無理で、感覚の基礎の上に言葉を発達させるのです。

この立場から遊びについて少し考えてみましょう。遊びは人間の心が発達していく上に大切であります。この点が条件反射の点で面白い問題であります。遊びが、人間の精神生活に大切かどうかははっきりしていません。今まではあそびは仕事程大切ではない。あそびは仕事に展開していくための準備であるという考え方がありました。ところが、フランスの学者(ソ連に影響された)一才と三才の間は遊びが大切なのは遊びを通じて自分を物から引き離して自分と物との間に距離をおくことがあるので、この点で遊びが大切なのだということがわかりました。条件反射は生れてすぐはじまります。例えば牛乳の入ったコップを見ると飲みたくなります。しかし、こういう条件反射ではコップと水を飲むという事の間には距離がありません。遊びの場合、コップはたたくと音がするという風になると

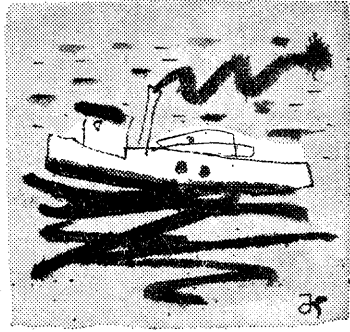
コップは単に水を飲むものではなくなって来ます。お互いがお互いに独立変化化する事が分るためにはコップといろいろな行為とを引離して距離をおく事が大切であります。この距離をおく作用が起るのは第一にあそびであり第二には模倣であります。幼児は模倣の場合そっくりと同じにまねているという意をもっているときとないときがあります。模倣は意識なしに行われると自分では似ているつもりでも実際には似ていない場合が多い。似ている意識は子供の心にとどまっている。進んで来ますと似ていないと不快になり技術をかえる。そこで模倣により物と自分との間に距離が出来てきます。

子供は想像遊びが中心です。想像あそびにおいてはある程度まで物の性質を想像により理解します。コップを水に浮して舟と考える。コップをみてそこにオモチャの行いの間にさかいを置いていきます。これは人間の認識の発展に大切です。というのはある程度物からはなれなければ物の全体のすがたは見られないのです。遊びは我々の中にこれをやらせてくれます。この遊びは二才過ぎてから活潑化して想像あそびに変っていきます。又構成あそびに変っていきます。構成あそびは模倣に結びつけその世界をつかみます。すなわち外の世界を自分の作ったものと違うという事を意識させます。遊びは積木あそびなどのように新しいものを作り上げていく事が大切であります。これは大人の場合も同じであります。この立場から幼児の絵とか積木をながめるとき精神分析かと感情生活を見る面が多い。幼児の感情のしこりすなわち欲求不満がどのように発展しているかはむずかしい事でありませす。しかし、そのために幼児の絵とか

積木に認識的契機が全然ないという事は誤りである。客観的なものが入っている。では指導はどうあるべきでしょうか。指導がいらぬということはありません。今迄の指導は間違っています。間違っているより、やらない方が良いわけになります。認識の発展を助ける指導を発見するのがこれからの問題であります。大人のもつ図式的なひからびたものを、幼児にそのままたえる事はいけない。が、大人のもつ図式的なものが全くいけないかというところではありません。大人のもつものでも御手本があります。これを幼児にあたえるときにどのような形でやるか問題であります。まるっきり放任の指導は行われていいとは思いません。

正しい指導とはどういうものなのでしょうか。生活の指導をすれば良いと云われますが、子供の欲求不満をこわがれば子供のケンカも心配しなければならぬ。欲求不満が神経症を起すわけではあります。ここに欲求不満の解消の仕方の問題が起ってきます。ソ連の考え方で動揺した原理は神経質に導くのに最もよい。父母の間、家庭と幼稚園の間の違い、これが幼児に動揺をまねきます。不満解消の仕方が方針をもっていけば神経質になる事はありません。一九五〇年からこの点で幼児心理が新しい段階に入りました。

フロイド派の弱点修正も必要でありましょう。我国にもフロイドの考えはひろまっております。フロイド派は家庭教育の面で意味がありますが行きすぎると駄目であります。最近の幼児心理の傾向はこの点われわれに深い反省をうながすものがあるとおもひ、ソ連のうごきを中心におはなしました。(お茶の水大教授)



幼児の生活指導

松村康平

ここに持ってまいりましたのは、家庭と幼稚園との連絡帳です。 連絡帳について

皆さんの幼稚園の中には、このような連絡帳による連絡をしているところがあると思いますが、連絡帳による連絡の大きな意義は、子どもが、家庭から幼稚園へ、幼稚園から家庭へと持ち運び、自分で連絡をしながら教育に参加していることにあります。つまり、幼児の教育をより効果的にするための行為に、幼児自らが参加し、やがては自己教育へと進むべき、その基盤が、こうしてつくられていくところにあります。

〔連絡帳の例文を読む。(入園の前夜は、うれしくて、寝床の中でむずむずしていました。「お母さま、ぼく、羽田へいきたいな。」「あら、どうして」「だって、日本が夜のときは、アメリカは朝だって、

お母さま、いつていたでしょう。だから、ぼく、今から羽田へ行って、飛行機でアメリカへいきたいなあ。この子にとって、どんなに長い一夜だったでしょう。わかるような、わからないようなことをいつて、笑わせていました。〕以下、略。〕

このような記録を幼稚園での保育に活用するとしなないとでは、ずい分違いがあるでしょう。幼稚園での生活指導は、家庭との連絡のもとにおこなわれなければ、十分な効果をあげることができません。(「保育のための幼児心理」厚生閣。「幼児と学校」福村書店、参照)

生活指導の意義

生活指導とは、どういうものをさしているのでしょうか。

基本的な生活習慣が形成されるように指導すること。保育項目の内容に関する指導以外のものをさす場合。幼児の保育即ち生活指導

という考え方。この場合には、「生活の指導」というような広い意味で使われます。この「生活の指導」が、これを通して望ましい性格の形成されることを目ざす場合には、生活指導が性格教育の意味を帯びてきます。

生活指導をどのように考えるかによって、「生活指導の基礎となるもので、それがなくては生活指導を正しくおこなうことのできないもの（生活の原理）」が異なってきますが、それについて、次のようなことが考えられるでしょう。

その一、幼児の生活に関する原理。その二、指導の目的に関する原理。その三、指導の方法に関する原理。その四、指導者に関する原理。その五、指導内容に関する原理。（「生活指導の原理」保育の技術（下）、金子書房、参照）

ここでは、その五について、少し詳しく述べましょう。

生活指導の種類

生活指導は、主として指導内容からみて、これを五つにわけることができるとしよう。

その一、「しつけ」中心の生活指導。これには、基本的習慣の形成を重んじる生活指導が、あてはまるでしょう。ここでは、反復の原理が支配します。例外を設けることは禁物です。習慣の「型づくられる」までは、反復しておこなうことが必要です。

どうして手をあらわなければいけないの？ どうしておはよう？ というような子どもの質問に、こうこうだからよと、

説明をつけ、納得するように心掛けることはできますが、食事・睡眠・排泄・着衣・清潔などの習慣づけには、そういうきまりだからよ、どうしてもよ、というように、それが型つくられるまで反復しておこなうのが、効果的でしょう。例えば、清潔の習慣などだと、大きくなって、衛生に関する知識がふえ、自分では清潔にしているつもりでも、台所に、お皿とソウキンを平気で「共存」させているような、アナがあくようなことにもなるので、言ってみれば「文句なしに」きたないものはきたないと感じるようになるためには、「しつけ」中心の生活指導が、有効のように思われます。

その二、遊び中心の生活指導。幼児の生活はすべて遊びであるという考え方に立っての生活指導は、遊び中心となるでしょう。この場合には、「わく」を設けて指導することは極力避けられます。指導という言葉も耳ざわりなほどで、「誘導」という言葉が、好んで使われたりします。自由保育が尊重され、「過程の原理」が支配します。つくりつつ、つくるものがきめられ、それによってつくる働きが考えられて、つくられていくような「過程」が、重要なのです。

遊具を手掛りとして子どもの「自発性」をのばす意図も、中にはしばしばふくまれているところに、特色がみられます。

その三、緊張解消（要求充足）中心の生活指導。これは、遊び中心の生活指導にもあてはまることですが、不必要な緊張を取りのぞくことを中心としているのです。「抑圧解放の原理」が支配しています。子どもにとっての大人は、抑圧を与えるものと感じられる場合

があるでしょう。

子どものしたいと思う気持・いだく要求などが、みたされぬと、性格をゆがめ、将来の生活のきずになるという考えからは、大人の圧力を取りのぞき、したいようにすることを奨励する生活指導が、重んじられます。「創造美育」の基本的な考えには、これに近いものがあるようです。

注意したいことは、「なんでもいい、いい型」の生活指導に陥ってしまわないことや、緊張解消の仕方・その方向を考えずにおこなわれること、などです。

子どもが、机の脚につまずいて転ぶ。すると、飛んでいって、「強い、強い。この机が悪いの。メッ、メッ」と、机をたたいてみたり、「よし、よし、泣かないの。ほら、あめよ。ほらね」と、気をまぎらわし、その場の緊張を、とにかくほどいてしまおうとする扱い方が、みられますが、そういうものでしょうか。

その四、問題解決中心の生活指導。これは、現在の緊張をほどけばよいといったものではなく、とどまって考える余裕をできるだけつくりながら、そこで自分で考える力をつけていくやり方です。

お母さんの手伝いのつもりで、ガラス戸をしめていると、手をはさむ。戸のへりをつかんで引っぱるものですから、戸と戸の間に手をはさんでしまいます。そんなとき、「痛かった、痛かった。チチンブイブイ。フッ」と、吹き飛ばして、なおそうとするようなやり方は、緊張解消中心の生活指導にはいると思いますが、「どうした

の。そう。こうやって、こう持って、こうして引っぱって。ああ、だから、こうやって、はさんでしまったのね」というように、もっていきと、子どもの泣き声が低くなって、「ウン、ウン」と、うなづいていたりするでしょう。こういう扱い方は、問題解決中心の生活指導にいれることができるでしょう。その場の緊張を解消することよりも、次に予想される場への構えをつくるのが、重きをなしています。二度また同じような失敗を「愚かしく」繰り返さないように、その場の失敗を未来に役立てるというわけです。

問題解決中心の生活指導は、小学校でも重視されてきたものですが、とどまって考えること、道具を使って生活を切りひらいていくこと、生活の場の力の緊張にたえながらその場の力に統一をもたらし、進むべき方向をさだめていく生活の仕方などが、重視される生活指導です。そこには、「洞察の原理」が支配します。その場に即して道具の使用価値を新しく発見することに重きがおかれているところから、「機能転換の原理」が、そこに支配しているとみられることができます。

その五、人格的感化中心の生活指導。そこには、「模倣」とか「暗示の原理」が支配しています。それはどういふことなのでしょうか。いつも服装をキチンとしていて、その人の前では、こちらがだらしなく感じ、おもわず身をひきしめ、かたちをただしたくなるようなときがあるでしょう。新しい幼児心理学の動向も保育の技術についても、その人は或いは知らないかも知れませんが、幼児たちに接

する先生の影響力・人格的感化力の強いことは知っていて、身をただし、修養を積んでいこうと心掛ける人たちは、人格的感化中心の生活指導をしていることになるかと思えます。

一人の先生ではなく、その子を包む人間関係を重視しそこにつくられる「雰囲気」といった集団効果を重視する生活指導もあります。

話し合いによる生活指導

近ごろは、話し合うという方法によって、生活指導をすすめることが多くなりましたが、ここで、生活指導の類型を頭におきながら、皆さんが五つのどれに重きをおき、生活指導の基本的なものとしているか、話し合ってみましょう。

〔話し合いの実施。三人一組になって話し合うように指示。〕

心理劇による生活指導

昨年の夏の講習会で、心理劇の話をして、実際にしていただきましたが、それ以後も教室で講習会で母の会で、実施し、保育雑誌にも発表し、今回も実演がありましたので、これに一度でもふれたかたには、それぞれ「ねらい」に違いがあっても、大体のことはわかっていただけかと思えます。劇化し、距離をおいてみることのできる「客観化の原理」や、役割をとってすることにより社会的なきまりを身につけていく「役割の原理」、場面を洞察し、行為のハネカエシを期待してふるまうことに働く「洞察の原理」や「生活の原理」、「ある」ことをあらわしながら、「ありたい」気持をみだして「あるべき」かたちでしめくりをつけることができる、そこには「自発

性の原理」「実践認識の原理」など、それが観客の前で演じられ「集団決定による」あるべき行為の確かさを約束し、観客は自己と同一化して自己選択をおこなう。「同一化の原理」が、そこには働くわけですが、くわしくは、次の講習会るとき「心理劇の応用」という標題で、お話ししましょう。（劇による生活指導」保育ノート八月号、参照）

遊びと生活指導（表現と鑑賞の問題）

おわりに、「指導」ということについてお話ししましょう。

遊び中心や緊張解消中心の生活指導では、「指導」の加わらぬほうが、望ましく思われるほどで、自由な表現が重んじられます。しかし、それも自己認識へと進み、自己教育へともたらされるのが、ねらいではないでしょうか。そのためには、「表現」だけでなく、「鑑賞」がともなわねばならないでしょう。けれど、どのようなかたちで、それをおこなったらよいのでしょうか。手本にあたるものを、どういうかたちで与えたり、それをとらえたりしたらよいのでしょうか。創造美育の運動は、大人が子どもの絵をみる見方をかえるのに、大きな貢献をしていると思えますが、子どもの「鑑賞」に関しては、理論的考察がかけられているようです。子どもの作品を、例えばはり出すところがあるようです。こうしたことをどう考えたらよいのでしょうか。それについて、一つの提案をしましょう。

鑑賞が表現をさそうかたちでおこなわれる鑑賞。鑑賞されるもの

が、鑑賞するものの行為をさそうものであること、感動の形式が、上から下への方向をとるものではなく、下から上への方向をもちらんでいて、鑑賞されるものに働きかけて変化させ得る性質をもっていること。手本の可変性。その手本が、鑑賞するものの中からうまく選んでいて、鑑賞することにより、次の手本が新しくつくられたいくような性質をもっていること。こういうことが、大切ではないかと思えます。この考えを保育の実際と結ぶと、それではどういうことになるのでしょうか。

子どもの作品の鑑賞の場合、奨励の意味ではり出して、はり出されてしまえば、それをみる子どもたちの問題が生じます。「これがよいのだ」と、キチンときままっている手本というものを前提にしての、表現・鑑賞ではないのですから、「よい手本に近いからはり出す」ということもできない。はり出すのなら、どの子の作品もはり出す。それによって一応の解決が得られるようですが、鑑賞する側に、作品相互を比較し、優劣を浮き立たせるような態度をせまるようでは、本旨からはずれません。「いろいろな作品があるものだ」とたくさんの可能性が感じられる、そうした鑑賞態度が望ましいでしょう。自分たちの仲間の作品が、親しみの感じの中で、自発活動をさそい、表現とつながる鑑賞をさそうでしょう。

はり出すのならば、その子の前の作品と今度の作品とをつなげてはり出す。これも、従来のやり方をやぶる仕方だと思います。入園のときと卒園のときの作品をつなげてはり出すことは、すでにして

いるところもありますが、手本における時間的变化の必要・可変性の重要なことを自覚しての、保育技術として、こうした試みのなされることを望まれます。

大人の作品の鑑賞。この場合にも、根本の原理はかわらないと思えます。子どものとらえる幼児文化財の二面性。これが、子どもの作品の場合と違うところですが、その場合にも「わくづける」鑑賞ではなく、表現をさそう鑑賞であるように、作品をととのえ、鑑賞態度をつくる必要があります。その意味で、デフォルメがいきてくるでしょう。もっとも再認・観察など、どのような働きをさそうつもりで文化財をととのえるかによって、鑑賞の仕方も違える必要があるのですが、「時間性」「可変性」「未完成(それが、子どもの表現をさそう動因として働くようなもの)」などを考えて童画への提言もまた可能なのではないかと思えます。

連絡帳については、その意義を述べましたが、成長する子ども自身がいわば手本の役割をしています。私のところ(渋谷・鷺谷さくら幼稚園)では、連絡帳に、子どもたちが毎週一回、「自画像をかいていきます。それが自己認識に役立ち、自己教育につながるものがあることを、意図しています。自分自身の成長が、新しい意味での指導における手本の意味をもっていると、考えられないでしょうか。

遊びと生活指導・表現と鑑賞のところで述べたことが、波多野完治先生の投げかけられた「認識的契機と指導」に関する問題の一つの解答を用意したことになればよいかと思えます。

一年保育と二年保育の問題

(八)

山 村 き よ

はじめに

三月からのせられたこの問題の御説を興味深く拝見してきたけれど、紙面の不足か、何かしら物足りない感じでおかきになった方々ともっともっと、お話し合いしてみたい気持ちで一ぱいである。いよいよ私の番になって、編集部からは具体的な指導方法という御依頼だったけれど、私は日頃考えていることをこの機会にこそと思っていたので、私共實際家の責任に於て解決したい問題の根本的なことを少しのべさせていたで、もし紙面があつたら具体的なことにふれたいと思う。

過去に於て私は一年保育児を十二年間もつづけて担任した経験をもち四十名の園児ととりくんだ、愉快な思い出を沢山もっている。

三組に編成の小人数の幼稚園で環境にも恵まれ、しかも自由保育説の流れ始めた頃で各組がお互いに遠慮することなく自分の計画を流して一日を楽しく誘導したので、ある程度家庭で身につけてきた「生活力」をもっている一年保育児に対して「おくせることなく」入りまじって遊ぶので、その姿を見て、当時若かった私は理論の上からは「小さい時から

幼児教育の必要性」を充分認めていながらも實際生活の上では一年保育児の方がかえって取扱いやすい上に、ある程度まとまりある生活が早くできるように想えてすいぶん考えさせられた時代があった。

その後、別の幼稚園では五、六年間をつづけて二年保育年長児の責任者で通した。主任という立場からいつも一人一人のこどもの姿に気をとめて教育の評価に心がけて一生懸命になった時代も又思い出される。幸いといつも職場と健康にめぐまれるので日々の生活が楽しくあれこれと、研究にとりくみながら、一年保育と二年保育の問題も真剣に考えたりした。その頃はあちこちで研究会ももたれ、ある研究会では先般御他界なさつた坂間ミツ先生が細かい調査資料をもつて発表されたことを中心に話がはずみ、故倉橋惣三先生の胸のすくような気持ちよい御指導をいただいたことも楽しい思い出で、その頃問題になった内容と同じことが、又二十年以上もたった昨今、あちこちで問題になっている事を考え面白現象だと思ふ。

それからつづいて戦時体制に入り国民学校令のもとに、幼稚園でも国の精神を幼稚園の

目標にかかげてお社こそ設けなかったが靖国神社を背景にして「がまんつよい意志力」の涵養につとめたので団体行動を気もちよくとらせるためには教師の命令に早く順応してくるというので、ここでも一年保育児が第三者の目には非常に立派に見えて、私は自分のクラスのことでも達が個人的には何かしら「力つよい」ものをもっているながら社会性の面では統制をみだす者が目立って、しかもそうしたクラスの「ふんいき」が全体の幼稚園の統制をみだす場合が多いので主任の立場にある自分を考えては「歯をくいしばって」自分のクラスのことも達を「見つめた」こともはつきりと想い出に残っていることであるが、又反面には三学期になるとそうしたばらばらな個人差も、目たたなくなる程「順応性」もでき、ことに劇あそびをしたり、リズム楽器をもたせたり、展覧会でもする場合には私の想わぬところに「すばらしいできばえ」を見せて一年保育の担任から羨しがられたことを想い出す。こんなとき、いつも思ったことは「このことも達を二年間通して計画性のある教育がしてみたい」ということであった。

戦後国の教育精神が変り、児童観も一変し

て「こども中心の」自由教育が盛んになったとき私共幼稚園関係者はほんとに喜び合ったものだった。今こそ個人的な社会性の問題と大いにとりこんで二年間を計画的に教育したならば幼稚園と小学校教育の連絡もスムーズに運ぶものと考え、過去の経験を生かして三年間は、がんばって見たが、あいにくとその頃の小学校の教育内容とはかくとして私の幼稚園が関係していた小学校の先生方の中には、ことに低学年の先生方には戦前と少しも変らないような「指導方法」をとられていたためにここでは小学校の先生方にも一年保育説がとりあげられた。しかし私は当時文部省から示された保育要領(試案)に楽しい経験を通して生活指導に重点をおかれ「成長発達に即して」という指示通りまじめにこども達一人一人に楽しい生活をさせるために苦心し、どうしても二年保育を立てまえに考えることがこども達を「より幸福にする」ことと信じて一生懸命若い先生方と勉強したことを想い出す。その時から、今もって正しい解決点を見出さずに「持ちこしている問題は」幼児達が始めて入園してきたとき(特に二年保育年少児を)

○気持よく個人生活から集団生活に導入して社会性を育てる最初の指導をするには教師の「考え方」をどのようにもつたらよいか、

ということ、いろいろの学者の先生方と経験ある實際家の先生方の中にも次のような二つの考え方が流れていたと思う。

1. 未分化な幼少時代であるから家庭的に情緒的にゆるやかな個々の生活から導入して次第に集団生活に誘導する。

2. 幼少の時期をはずしては生活指導を「正しく」することはできないので最初はある程度型にはめるようでも「幼稚園児としての躰」を身につけてから楽しい集団生活の中で個人的な生活指導をする。

こうした根本的な問題が解決されないで表面的「保育形態」ばかりががちこちで問題にされているとき、時あたかも幼稚園ブーム時代がおとずれて、私立幼稚園は雨後のたけこのように乱立し、したがって先生の質の低下は止む得ず、高校卒の未経験者がどんと幼児の遊び相手に選ばれてしかも一人の受持つ人数が五〇名近く又は六〇名位の幼児を二人も三人の先生方に導かれて、計画的な目

標も持たず、評価もないような幼稚園の状態
においこまれてもまだ入園希望者は收容しき
れず、教育の機会均等から文部省では「就学
前一年だけの幼児を收容して余ゆうがあった
場合に二年保育を」との御指示をうけたので
公立幼稚園では二年保育が始ったり、一園に
四〇〇名、五〇〇名の一年保育児を收容する
大きな幼稚園も誕生して私がかつて夢見てい
たような幼稚園とはおよそ変つた型の幼稚園
があちこちに誕生した。

こんなときに「幼稚園教育の効果」があら
ゆる方面で問題にされて一年保育児と数少い
二年保育児が対照とされたり商品のように扱
われてA児とB児の評価がはっきり紙の上に
かかれてみたり、ある特種な幼稚園から、特
種な小学校に進んだ小人数のこどもを対照に
して「幼稚園教育をうけた者は落ちつきがな
いとか団体の統制をみだして困る」等々あち
こちに波紋をおこした。幼稚園教育の結果が
小、中学校の教育と同じようにははっきりと
表わせない部分の多いことをどうして説明し
たものかと非常に苦心したときもあつた。一
年保育児と二年保育児を比較する場合にも、
「身長や体重」、「生活態度や能力」など表面

に表われたことのみでは絶対に表わし得ない
と思う。一年間家庭で「結果を多く求めて生
活させた生活力」と、幼稚園で「過程を重ん
じて創造的に積極性をもたして生活させた生
活力」の「相違」がどんな場合に表われてく
るか、又役立つっているものか？ こどもの姿
をながめているとほんとによくつかむことが
できる。

現在私は園長の立場でこうした問題ととり
くみながら二年保育の効果がどんな場合にど
のように表わし得るものかと「こどもの姿を
追いかけて」いる。一年保育児と二年保育児
の姿には、はっきりとこの「家庭からもたさ
れてきた生活力」と過古一年間に幼稚園でゆ
っくりと身につけた「生活力」の「相違」を
見出して、その指導上の注意をうながしなが
ら九人の教員がかわるがわる一年保育と、二
年を継続した二年保育ができるように編成
し、一年保育児は一学期で早く二年保育児が
過去一年間に味わつたような「楽しさと生活
力」を身につけるよう努力させ、二学期から
は全部が年長児としてのカリキュラムで進め
られるように教員同志の研究を援助している
つもりである。

二年保育児が年長組になつての四月五月は
非常に苦心して指導すべきときで、この頃の
こどもは成長発達の一段階にあるのか、又は
指導の「まずさ」からくる影響か、先生や母
親の期待を裏ぎつて妙にはづかしがつてみた
り、中味のない「からいばり」のこどもが目
立ち、時には先生の計画がはずれると思わぬ
ところにそれといつてしまふことがある。こ
んなとき入園したての一年保育児は当初から
大体足なみが揃つて自然とクラス全体がまと
まりあるように第三者の目につるので、こ
とに保護者の啓蒙にあつては園長として充
分「幼稚園教育の使命」がどこにあるかを認
識させ、二年保育児のもっている「生活力」
が「どうして育ち、どのように今後の生活に
役立つ」かをわからせて一年保育児が早くこ
の「生活力」をもつように「家庭生活の正しい
あり方も」指導しなければならぬと思う。

おわりに

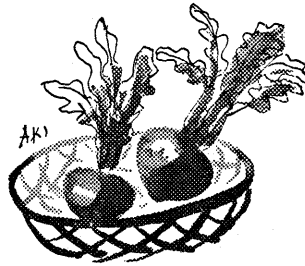
とうとう紙面がなくなつてまとめる事がで
きず誠に申訳なく残念に思うので、いずれ
機会を見て具体的な問題をのべさせていた
だき度いと思ふ。

アンケート

小林 操 原田 春子
土屋 真砂子 阿部 伊都子
川崎 千東 元木 正子

(御意見を伺つて) 堀合 文子

三年保育の経験と観察



小林 操

この半年間、はじめての経験として、私は満三歳児と生活を共にしてきましたが、入園式を迎え、次々に母親に手をひかれて登園してきた子供達をみたときは、希望と不安が一時に到来し、今後の指導はどうしたらいいだろうか、そのむずかしさを痛感いたしました

た。
卅一年度は全般的な現象として幼児数激減のため、本園では三歳児をも收容することになりましたものの、三歳児の教育にふさわしい設備を持たないことと、三歳児がどの程度のものか私には、しっかりつかめなかったこととで、今後どのようにして指導していったらいいかまよってしまいました。が、一応迎える準備として、次のような心構えを用意しました。

出来るだけ他からの抑圧を少くし、その場、その場に依じて、具体的な指導をし、それを教師ともども反覆するという方針を樹て一方また集団生活には未だ特に未経験な時期であるので幼児が幼稚園という意識に固くならず、家庭の延長として、たのしく生活が出来るような環境整備に努力することを目標と

いたしました。

戸外遊びの際は小学校と同じ校庭を使用するので特に小学生の抑圧を受けないように注意して、三歳児独特の遊びがのびのびと出来るように心がけました。

入園当初は、他の子供が遊んでいることに関心を持たずただ傍観しているだけで、それを真似ようとしたり、仲間に入ろうとはせず、自分勝手に好きなことをしているというこどもがおおかったのに、五月初めごろには砂場などで他の子供が遊んでいるとその中に入って、他人に無関係にはあるが、バケツに一杯砂を入れたり、水をくんだり池にしてみたりする場面がみうけられるようになりました。第一学期の終りに近いころには、お友達と遊ぶことがおもしろくなり、自然と皆に引きずられて楽しそうに遊べるようになってきました。

観察記録の中から、一、二の例をあげてみましょう。

○一人で積木が片づけられるまでに

レコードがなりはじめるとSちゃんはいつものように椅子をもつて前に集まってくる。

あとには机上積木が縦横無尽に散らばっている。

「Sちゃん」

呼ぶとふりかえってみる。

「積木を片付けてから集まりましょうね」

「あとでね、しょこにおいててね」といううごかない。

「お約束したでしょう、あとでじゃなくて、片付けてからよ」

「さあ、お片付けできるのね」

Sちゃんは仕方なしに積木を箱の中に、ぼんぼんほうり投げました。

数日同じことをくりかえしての或る日、Sちゃんは、だまって片づけはじめた、けれどそれは、いやいやでなく、

散らばっているものはどんどんなくなっていく、今度は箱の中にきれいにつみかさねられるようになりました。

○はじめてのスキップ

ただ一人でみんなのすることをみていた、Hちゃんの上半身が前へのり出してきた。

こんなことは、初めて、この機会をのがしではと思い、さっそくそばへよって、

「面白いわねえ、Hちゃん」

するとHちゃんの手が私の顔の前へとんできたが、Hちゃんのほほには、ほんのかすかだが、ほほえみの影がたまたまようにみえた。

好調だ、この機会をのがさず今日こそ仲間に入れてやろうと思ひ、

「Hちゃん、さあ、いらっしやい」と声をかけると今度はすぐにとび出してきた。

Hちゃんはどうしてもスキップをしない子供だった、よく活動するけれど、スキップだけはどうしてもしなかったので到底だめかと思っていたのが……

リズムにのっている、思わず他の子供達の口からは「あつHちゃんが」とおどろきの声もれて了った。

入園当初は、当然のことながら自己中心的でかなりの非社会性をもっていて、集団の成員になり得るのも二、三人位であったのが、半年後の今は遊びも単独な遊びより団体的、協同的遊びに移り、自分達で遊びを工夫し、従って生活も豊かになってきたように思われます。

以上ふりかえてみますと、新しい生活へとけ込んでゆく過程では、四歳児以上の幼児の場合と大差のない実態が見出されますが、この時期に於ける一年間の差というものは指導上相当考慮すべき面があるようです。

この差を急激に縮めようとするのには弊害が伴うことであり、指導者は根気よく出来るだけ具体的な場面をとらえて、自然に慣れさせるということが大事なことに思われます。

先ず他からの抑圧を出来る丈排除して楽な気持ちで新しい生活に入り得るような状態に配慮することですが、それには、あく迄も家庭の延長というような気持で通園の出来るような環境を与えてやるのが第一です。そして教師の側としては、決して無理な要求をせず成長を見守りながら、あくまでもそれに即応して指導してゆくという態度が必要と思われれます。

そして特に三歳児に対しては、理屈や説明に依るのでなく、実際の場に於て具体的な事柄によって指導を反覆するということが最も効果的な方法であると痛感しております。

しかしながら母親や、家族の者の附添いな

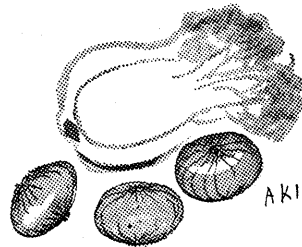
しで、三歳児を園外保育等につれて行って見ますと、母親などと一緒に行ったときは全く別人のように、自主的に、自分の身辺を処理し、乗物等にも、人の力を借りないで乗り降りができ、いじらしい程自分を処理していく力を持っていることに驚かされます。

一学期間位は三歳児を園生活に慣らすために指導者は随分手がかり、骨が折れますが、二学期頃になって園の生活に慣れて来れば、指導を受ける態勢も徐々に身につけて来るように思われる。

三才児の指導に当って、特に重要な条件としては、まず第一に一人の指導者に二十名程度の人数で、一人一人の指導に十分の考慮が払われるような状態にしておくことである。

第二には三歳児に対する教育計画——カリキュラム——の研究と用意をすることである。三歳児と四才児とを同じ計画で教育するには、この一年の差は到底指導が不可能であると思われる程大きいのである。今後各園で三歳児がだんだん多く收容せられるようになる研究が重ねられることと思われませんが、私の乏しい経験から上記の二点について十分の用意がなされなくてはならないと思われれます。

用意がなされなくてはならないと思われれます。



(東京・日本橋城東幼稚園)

〈三歳児保育礼讃〉

土屋真砂子

本園は昭和九年の創立。幼稚園から高等学校迄。「和明誠」の理想を目指して一貫の教育に邁進。幼稚園は三年課程の一、二、三期。二年課程の二、三期の五組を以て編成。一年保育は行わず。三年保育を最も理想としています。

三年保育を望む家庭は幼稚園教育の最も正しい理解者であり協力者である。

母親の手助けのために早く幼稚園え入れようというような保育的の意味をもって希望する者は殆どなく、むしろ家庭の保育の手は

十分であるが、早く集団生活の中に入れた方がこの子にとって真に幸福であるという教育的な信念の下に入園させるものが多うございませす。早期入園の理由を分類してみますと、

発育が順調で集団生活の適応期が来たから、遊び友達がないから、近隣環境が悪いから、大人ばかりの中で子供らしさを失うから、祝父母を中心に溺愛に流され易いから、兄妹の経験から三年保育を理想と思う等であつて、幼稚園え早く入れると、集団の束縛が重荷になって可哀相だとか、何かと覚え過ぎておませになるとか、人の真似をして見栄のために入園させるとか、入学後の成績の優秀を期待するとかいうような昔的な考え方はなく、三歳児としての心身の発達段階に適當した幼稚園生活そのものが、子供の成長の基盤として真に大切であり幸福な経験であるという熱意に燃えた見解をもっているといふことは保育者にとってまことに有り難く百万の味方でありませす。

三歳児は純真素朴な個性を惜しみなく發揮する。そして速やかに安全感にみちみちた集団のふところに入ることが出来る。

年長児になると人の前に出ると恥かしいとい

か、こわいとか、或はわがまま強情さ、家庭のおしつけや要求から、なかなか生地のままの性格を發揮するまでに手まどるものもありませす。三歳児にあつては至つて淡泊、家庭の急場仕込みの教えごとは何の効目もなく何ごとも赤裸々に行動するので、潑刺とした個性を速やかに明白につかむことが出来ませす。

入園の当初附添人から離れないで泣きわめ何人かの子供にあの手この手の技術で悩むことはどちらの園でも経験することと思ひませす。こんな場合にも年長児は何も彼も承知していて強情にわからずやを發揮するので、納得させるにもだませすにも手まどるものませす。三歳児の場合は至つて幼稚で単純、親から離してしまえばけろりとして先生の膝に胸に抱かれてまいりませす。今年もS君は先生に抱きままちゃんが老人と附添人室で待つてまぢゅからね」と自分がされたとおりにして人形に自らを求め慰めていた愛らしさ、またN子ちゃん自分か馴れて泣きやむと、一足おくれ自分より体の大きいしかも男の子の手を引いて「泣いちゃ駄目Nちゃんがいんこうみせであげるわ」「ほらお鼻をかんて上げるわ」

「お靴をはかしてあげるわ」と自分の涙をおさえてのお姉様ぶりの中に、はじめて一しょになつたお友達と極めて自然に可愛い社会性を育てていました。之はほんの一例に過ぎませんが、このように母と子兄弟姉妹に流れるような家庭的な和やかな愛情のつながりを基盤として三歳児の集団生活の営みが始められるわけございませす。

三年間の保育の發展は個々の成熟度に応じ子供達の力で無理なく力強く成長する。

保育年数が短いと母親達は就学を前にとかく子供達に過重な期待をかけるあせりをもつ危険性があるし、子供の側から申せば幼稚園生活が切角身について愈々集団の興味に油がのつて来た頃には修了となり、また先生の側から申せば各自の個性をすっかりつかんで之から本格的な教育をという時にお別れしなければなりません、ところが三歳児にあつてはまだまだ前途遠遠、何とかなるだらうといふ気楽な親心に先生も子供も極めて悠々と第一年目の特徴、集団的な交友が出来たり、遊びが交流したり、協同的だつたりするわけではないが、集団の中にあるという楽しさを、何もしいないでもただ嬉しくて嬉しくてたまらな

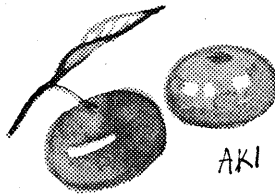
い気もちで自由に味わうことが出来ます。第二
二年目には幼稚園生活が身について自由に羽
ばたける喜びにあふれ、幼稚園中のいたずら
を一身に引きうける程の活躍ぶりで子供らし
さの世界を満喫することが出来ます。第三年
目にはお兄様お姉様のリーダークラスとして
の自覚も出来、すべてに自発的に、創造的に、
協同的に、実に線の太い力強さをもつたおち
ついた迫力のある生活が営めるようになりま
す。

三歳児組は全園の和やかな雰囲気の中であ
る。三歳児の教育には特に豊かな環境の考慮
と行届いたケアーを必要とする。

三歳児と四歳児との心身の発達に格段の差
のあることは既に科学的に立証されているこ
とであります、従ってその教育施設に方法に
特別の研究が必要であることは当然でありま
す。三歳児教育を礼讃しながらそれを全うし
ていないことは実に恥づかしいことですが、
只今は三十六畳の和室に二十五名を収容し、
年齢相応の豊富な玩具の準備に努め、子供達
が好きな遊びが何時でも自由に出来るよう
に、適度の休息が随時に出来るように、自己
の身のまわりを処理する習慣が円滑に行われ

るように努め常に心身の診療に留意していま
す。音楽、絵画製作、リズム遊び等の保育内
容は、組の交流を自由にして年長組のを観る
ことを楽しむ生活や、先生と一しょに遊ぶ生
活を主とし、その中に芽生える自発性、参加
性を大いに尊重し、その機会を捕捉して先生
の目的コースに誘導していくより遠浅式なカ
リキュラム運営にとめております。

(千葉県・日の出学園幼稚園)



川崎 千束

あの頃の保育形態は、あれでよかったのか
しら……私の胸を去来する影があります。

その影とは——この園の創立当初に、四五
歳児に交えて六名の三歳児を保育したこと—

—その事です。三歳児は、四歳児の一歳年下
の児であるときめつけてしまわれない特質と
特長を持っていました。私はそれに就いて深
い理解なしに保育を進めたようで、その事が
今だに胸奥に影を落しているのです。

六人の三歳児のうち、一番年少(三歳三ヶ
月でありIQも一〇〇、家庭条件も「普通」
といわれるS子を選んで、その活動の数場面
をうつしながら私の心の影について考えてい
ただこうと思います。

その前に、その頃の保育形態を記すのが順
序のようです。

五歳、四歳、三歳、いり混ったの一クラス
編成の上に幼稚園の創立という条件下で、私
は出来るだけ保育が課業的な形態にならない
ようにと心がけました。カリキュラムはあつ
ても、子どものその日の遊びにヒントを合わ
せて保育の主題を持ってゆくようにして、の
びのびと自由遊びが楽しめる雰囲気をつくら
うと配慮しました。その為か六名とも何の抵
抗もなくスルスルと幼稚園生活に入りこむ事
が出来ました。この安易さが教師の気をよく
したのか、いいえ、それよりも前述のような

保育形態をとる場合、教師側に豊かな愛情と強い信念と、すぐれた技術とが必要だったのでしよう。私はいつの間にか四五歳児に焦点をおいて課業的な保育形態をとっているのでした。何故そう変っていったのか？

要するに私が前述の三条件のいずれにも欠けていたことは明白で、強いて云えば次の事も誘因となっていたのでしよう。

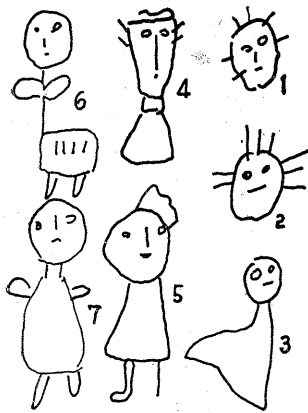
この年のことも達は入園児に、二三を除いては体位が平均より劣っていましたので、牛乳を午前十時に一斉に飲ませる事にしました。この一斉ということが惰性になって次の活動をも一斉にし勝ちになりました。

「またSちゃんがいない」

皆が保育室に入って、鉄で、クレヨンで何かをつくり出そうとしている時、S子はきまっで保育室外に脱走してしまふ。大低の場合ままごと道具を一人占めして悦に入っている。私はそれを見逃そうとするのだけれど、子ども同志では物議をかもし。

「お水入れちゃいけないんですよ。いくらいっても入れちゃうんですよう」

「おままごと、ちっとも片付けとかないの」



「クレヨンだって、しまわないよ」
社会性を養って円満な生活をさせるように導くのが大切な事だったと気付いて、保育室に連れ戻そうと試みるが、頑として承知しない。第一反抗期だからであろう。

粘土いじりと、自由画は好きらしい。粘土では蛇専門、自由画は人物が専らであるのは一冊十六枚すべてがクレヨンのなぐり描きである。No2の画帳から数枚、なぐり描きのともなった人物画が出てくる。この児の画帳は殆ど人物画で埋められている。女兒に珍しくチューリップ病にかかっているのら、積極性もあり、新鮮味もそなえているのだらう。

人物画は前のように進歩のあとを示している。

言葉はチ音化の上に音節の省略があるので耳馴れないと意味を汲みとる事もむずかしい。それでも自身は一人前を自負していて、

「Kちゃんは(四歳男児)は私の事、遊んであげるっていうだもの、私がお母さんなのになさ。(チ音化を訂正して記す)

「先生、バスに乗って見に行った葉っぱがおちてる。おちてる」

これは公孫樹の葉。バスに乗って東大の公孫並木を見に行ったことがあるので。

排尿の自立は出来ているのだけれどもしばしば、そうを繰り返す。幼稚園常備のパンツはS子の専有物になった。十一月末の寒い日洗った長ズボンが乾かないので、大急ぎで職員室のヒーターで乾かしているところへM子があらわれて「どうしたの」とたずねたのに、

「お湯よ、お湯こぼしたんだもん、ん、ねえ先生」
教師がいつも「お湯をこぼしたのよ」と云いかばうからだらうか。

M子とはいつもはげしい喧嘩をする。同じ

三歳児で家も近所であって、お互いが知りすぎていけるせいもあるうが嫉妬もなかなか盛んである。

× × ×

限られた紙数がきてしまいました。S子の記述もこの辺でカットして、私の至らない保育ぶりについていろいろ御意見のある事と思います。私は私なりに、影をかえりみて次のように考えて居ります。

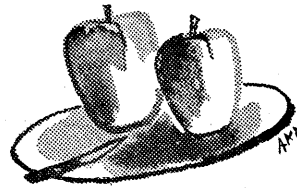
1 三歳児は、現存のような四五歳児対象の保育室での保育は不向きでしょう、もっと「休息の場」を考えねばならないでしょう。

2 十時には軽いお十時の必要もあるようです
3 三歳児だけの小グループで保育すべきであるのは論をまたないでしょう。

4 自我の意識の芽生えの時期であり、反抗期でもある事を常に考慮にいれるべきでしょう
5 どんな場合でも教えるという形式はさけるべきでしょうが基本的習慣や良習慣形成には三歳は尤もよき年齢であろうと考えます。

6 そして何よりも、和やかで愛情にみちた雰囲気包んで安定感を与える事が大切であります。

(東京・家政大学附属みどりヶ丘幼稚園)



原田 春子

私の園では今まで三歳児の保育は行っておりませんでした。今春入園希望の三歳児が

四名あり、園としても来年からは三年保育も行いたいと考えておりましたので試験的にこの四名を入園させました。三歳児と云っても

二名は四月生れで発育もよく四歳児と変らぬくらいですが、他の二名は十二月生れで、身体

の格好と云い動作といい、まだ赤ちゃんらしさを脱け切らない子供です。この四名は四

歳児約三十名のクラスと一緒に入れましたが、今年

の四歳児は生れ月の遅い者が多く、十二月以降生れの者

がクラスの六割を占めており、三歳児の大きい者よりも生活能力の低

い者も数名居ますので、三歳児達が特に、かけ離れてやりにくいとゆうこともなく一学期を過しました。この間、四歳児の小さい者も含めて年少児の特色と云うようなものが観察されましたので私の感じたままを記してみます。

入園当初に見られる堅くるしさやよそゆきの気持は年長児に多く、年少児にはこのような緊張感は少ないようですが、新しい環境に対する不安定感不安定感は小さい者に強く見られまして一寸変わった事があると心配で落付きがなくなり、幾度も同じことをきいたり念をおしたり、又何でも直ぐに解決がつかないと不安でたまらないというようすです。

この子供達の行動は、はじめの頃は、氣まぐれで周囲のものに左右され易く、積極的な意欲というものが殆どありませんでした。登園して靴をはき替える時など、靴ぬぎ場に見とやがみ込んで、いつまでも友達との遊びに見とれていたり、カバンを置きに行く途中で脱線してしまったり、持物の始末だけでも随分長い時間がかかりました。遊びに入る過程も、誘われるままに何となくままごとの場に入っ

と回って見たりで、自主的な行動というものが見られませんが園の生活に安定感をもってきた一学期の終り頃には大体の子供が積極的に遊びに参加するようになり、遊びの持続時間も長くなって、保育計画の予定も変更することがしばしばありました。

話し言葉は、最年少の二名が幾分発音不完全ですが、赤ちゃん言葉ではなく、年長児に赤ちゃん言葉の者が二、三名いるのは家庭的なものであると思います。生活発表など断片的ながら年長児よりも恥かしがらずにします。人の話を聞く事にはまだ短時間しか注意を集中できず、紙芝居も普通の十二枚物は(物語をかんとんにしても)長過ぎるようです。三歳児向にはごく単純な筋の、語数の少ないもの、紙数も五六枚のものをゆっくり読んでかせるのがよいと思います。

絵画は三歳児中二名(最少児一名)が意図的なものを描きますが他は(四歳児数名)錯画です。描き度い時に自由に描いた絵は非常に生き生きして居り、一斉に描かせますと無気力なものしか描けないことが多く、大勢に同時に描き度い意欲を起させる事はむずかしいと思われました。クレヨン、指絵、ポスタ

ーカラーのうち、ポスターカラーを最も好むようです。筆にたっぷり含ませて太い線を思い切って引いたり、色々な色彩で画面を塗りつぶしたりしているようすは実に楽しそう

やりズムに合わせて動くことなどは皆が大好きで、人前でうたう事も年長児より平気です。また音程やテンポを正確にうたう事はむずかしいようですが、うまくなくてもよろこんで臆せずに歌う態度をこのまま伸ばしたいと思います。又近頃のように子供の周囲に俗悪な音楽が絶えず流されている時、少しでも小さいうちにより環境の中におき、美しいもの、健全なものに親しませる事は何より必要と思

製作では粘土を一番よろこびます。いつでも使えるようにしてありますので、長時間に没頭している子供もありません。一塊の粘土を、圧したりのぼしたり自由に扱って、これを征服する満足感を十分に味わっているようです。やがて何かを造り出そうとする意欲が湧き、すばらしい傑作も生れることでしょう。年長児特に一年保育児には絵にも製作にも出来上りの上手さということにこだわって、とかく無難なものを描いたり作ったり、

集団のきまりを守ることは、はじめは年少児になかなか納得がいかないもののようにして、自分本意に勝手な行動をとるので、友達から攻撃されたり、けんかになったり、自分も不愉快な思いをする事を幾度も経験するうち、ようやくきまりを守ることの必要さがわかってきたようです。

又自信がなくて投げ出したりする傾向も見えますが、年少児は結果の如何を気にせず製作の過程を楽しみ満足していますので、この気持を持ちつづけ自信を強めて行くように指導することを心がけております。

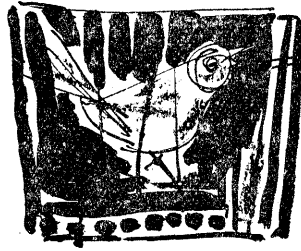
以上私の貧しい経験から学びましたことを述べた次第ですが、年少児を保育して特に感じましたのは出来る限り一斉保育を避けて自由保育をするのが望ましいということ。心身の発達

音楽リズムの感覚は子供の素質や環境によって、それぞれ異いありますが、うたう事この年令の子供達を一斉に扱っては無理を強

いることが多くなり、伸びかけた自主性の芽を萎縮させてしまいます。

又なんと云ってもまだ幼い子供達です。集団の生活に、不安や怖れや不満をもつことのないよう、お母さんの手から抱きとるようないたわりのところで迎え入れ、教えるというよりは見守り育てるといふ気持で保育することが必要だと思います。

(東京・柏木幼稚園)



阿部伊津子

私は十人の三歳児と共に一学期を過ごした。男児三名女児七名、うち商店の子供男児二名女児一名アパート住まい女児一名他の六名は恵まれた家庭環境の子供。両親は全部健

在。ほとんどが標準以上に発育したかわいらしい子供達であった。保育室は四歳児二十三名と同室。その一隅を三歳児の机の場所として席は定まらなかった。

三歳児は頭の大きいのが目立ち総ての行動がたどたどしく運動機能が発達していない事、この点ですぐに四歳児との区別がついた。入園式の日母親に手を引かれうれしそうに帰る三歳児を見送りながら「どうかよろこんで毎日遊びに来てくれるように、そして私と仲よくなってお母さんのように思ってくればよいが、早くお友達をさがしてあげよう」などと考えていた。私はその願いをそのまま一学期の目標としたのであった。

翌日からの三歳児との生活は予想に反し大部分の子供が積極的に上靴のまま外へとび出し恐れ気もなくスベリ台やジャングルの上にはおぼろ、ままごと道具に水を入れる、お帳面とクレヨンを持出してところかまわず描く、出しっぱなしのまま積木を始める、オルガンをプープーやってみる等で私のスカートにはかりつかまわっている子供など一人も無く、何しろ危険についても未だよく理解出来ない三歳児の事故、私はどこへ行くのか何をす

るのかと幼い姿を追ってとび歩く始末だった。それに比べて四歳児はお友達や先生に対する遠慮から思う様に動けず、黙って椅子に坐ったままの子供が大勢あったのは面白い現象だった。こうして三歳児にとってなす事総て新しい楽しい一週間が過ぎ、この間に私と交わした会話は「お水飲みたい。お人形おんぶするの。靴がないの。おしっこ」等必要に迫られての発言のみであった。子供同志ではままとの場で二、三の女児が簡単な言葉で交わしていた外は見られず、遊びは一人で好きな事をして、持続時間は五分以内位で、お友達が側によって来ると止めてほかの遊びに移って行くという風であった。

二週目、三週目と三歳児は元氣一ぱい遊びピアノを弾けばとんで来て、スキップの出来ないのもかまわずにとびはね、その両手で体の調子をとるようにしてはねる不安定な様子は三歳児独特のもので、四歳児には見られない動作だった。缺も進んで持ちたがり一名の男児を除いては全部が画用紙を切る事が出来た。(折紙程度のうすさはむずかしい)こんな風で、三歳児の机の上は、切りきざんだ紙、なぐり書きをした新聞紙や包み紙、出しっぱ

なしの缺やクレヨンでいつもこったがえして
いる有様であった。お友達同志とも次第に会
話を交わす様になり、玩具やブランコの取合
い等からけんかも起る一方、同室の四歳児別
室の五歳児とも仲よくなり、可愛がられ、五
月に入ってからはお弁当で疲れを回復した午
後の一時を、大積木のお家、椅子を並べた汽
車ごっこ、木陰のおままごと等に大きい組の
お友達といり交じって夢中で遊んでいる小
さな十人の姿をじっと眺める静かな時間を持
つ事が出来るようになった。私はよろこびつ
つも、こうはりきったのでは疲れてしまはし
ないかと心配して、休息をとる事に注意し、
四・五歳児より一足早く帰すようにした。こ
の頃には用便の世話はほとんどいらなかつた
がお弁当靴のぬぎはぎと始末、お道具箱玩具
の後始末には四歳児より大分手がかかつてい
た。とにかく元気いっぱい遊び、試み、よい
子になろうと努力している事がその小さい体
にあふれ、今思ひ出すと何かいじらしい感じ
のするあの頃であった。

五月下旬頃から朝母親と離れられず、ひと
さわぎする様な子供が三、四人現われはじめ
他の子供も疲れ気味となり、お友達がじめ

るからと登園を渋る子供も出て来た。もう自
分で出来るようになった筈の身の回りの仕末
を面倒がったり甘えたりしてしないような事
も見られはじめ何か自分は、又は自分の組は
(組というものの理解が大分出来てきた)一
番小さいんだという甘えた気持を持ちはじめ
たかにも見えた。そして今までの緊張は次第
にほどけて私のいう事をきかなくなったり甘
えたりするようになり、三人の男児は次第に
皆と一緒に行動が出来なくなり、ある時は三
人揃って、又は一人一人勝手な事をして私を
困らせた。こうして緊張の後の疲労や一応幼
稚園の生活がわかって珍らしさがなくなつて
来た暑いこの時期をやや混乱状態で送つたの
であつたが、私はやっと皆の本当の姿に接し
得たのであつた。これに反し四歳児は集団生
活に馴れお友達との遊びも日々に発展しぐん
ぐん三歳児をリードして行つた。

其の後七月に入って涼しい短縮保育を迎え
ると共に三児も調子を取りもどし一息ついた
時には夏休みがやって来ていたのであつた。

一学期終了後の家庭訪問によつて、
1 多少の波はあつたが登園をよろこんだ。
2 挨拶がきちんと自然に出来るようになった

3 用便が一人で出来後の手洗いを忘れない。
4 食事のしつけがよい。
5 動作が機敏になり特に特に足がしつかりした。
6 口のきき方がはっきりし言葉をおぼえた。
7 帰宅後すねる癖がついた。
8 男児の言葉をまね乱暴になつた。
9 家人に口ごたえし云う事をきかなくなつた
10 弟妹をいじめめる(しかしいたわるようにも
なつた。)

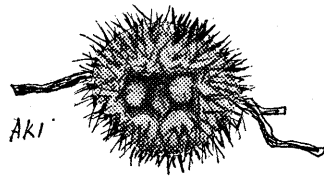
というような家庭の方の御感情を得、私の
観察とほぼ一致していた。

ふりかえつて見ると専用の保育室を持たぬ
三歳児十人を早く園に馴れさせ園の遊びをよ
り楽しくしお友達が早く出来るようにと、や
や意図的に年長児に近づけた方法はたしかに
ある点に於ては初の三つの目標を達する役立
つたと思う。しかし四、五歳児がそれ相当の
発達を見せている今日、二学期には今までよ
りもっと多く、

1 三歳児だけのおちついた時間を持つ事
3 自由遊びの場合にも三歳児だけの自由遊び
の時間を持つ事——対等な相手と遊ぶ事の
重用さを考えて
を考えている。終いに三歳児の出席状態は

水疱瘡の為長欠した一名の女児を除いては非常によかつた事をつけ加えておく。

(東京・阿部幼稚園)



元木正子

何か感想を書く様にとの事ですが、私が三歳児を受持ちましたのは今年四月より一学期間の未熟な経験しか持って居りませんので、特に感じました二三の事について記して見ようと思います。私共の園では以前より三歳児を数名位つつ年少組と一緒に保育しておりましたが、一組出来ましたのは今年で四年目に当ります。園児全体から見た三歳児は心身共に幼なくてすべての動作が可愛らしく、子供達同志も非常に親切にして遊んでいる様子で

した。今迄五歳児の組を多く持ちましたので、三歳児を持つと云う事となると、五歳児とは違ふ心の準備が必要だと思ひました。入園当初は、保育室に入る迄が仲々大変で、十八名のお子さんの顔が揃う事は、スムーズには行きませんでした。男児八名、女児十名の組ですが、泣くお子さんは、男の方が多い様でした。こちらが待ち受けていて、かえって具合が悪かったり、知らん顔をし乍ら神経を配っておりまして。お母様方の理解もあつて、少々の無理をしても、根気よくお連れ下さる方があるので、私も、半日の間、お母様とお家を思い出さない様に、話す言葉にも気を付け、早く馴れる様に努力しました。大いのお子さんには、話しかけられる事が嬉しいのに、中にはかえって迷惑な顔をするので、時間をかけて、待っているより仕方がないと思つたお子さんもありました。保育室内での遊びは、始めお客様に行った様に、おとなしく、眺めていたりする丈で積極的に遊ばないので、色々と遊び道具を用意して一緒に遊びました。園での約束事も、くり返す毎に出来る様になり、御挨拶とか、手を洗う事とかは、お母様方にも喜んで頂けました。幼稚園という集団生活が家では実行出来ない事が容易に出来ると感じました。おべん当を持って来る頃になると、朝から何度も棚のぞきに行つて待っている様子はほほえましく感じました。心配していた程の事もなく、食事事も上手に出来てほつとしましたが、何と云つても時間が掛かります。年長組の時は、私が席につく頃、すませてしまふ人も居ますのに、何度か口に運んでも、小さい為か仲々はかどりません。でもたのしみにしていたおべん当ですので、一番嬉し相でした。一日の保育時間が永くなりますと、夢中で遊んでいたお子さんもふとした事から、「お家へ帰る」と云い出すのには、まだまだ私の指導が足らない事と反省させられました。と同時にお母様の力に及ばないとは思ひ乍らも、幼ない丈に心に深く入っている親の愛情というものをしみじみ感じました。馴れてくると、色々の遊びの場に衝突が起るようになります。家庭で自分を中心にした生活をして居たので、一寸した事でも泣いたりしますが、三歳児丈に先生に持ち込む事が多いようでした。ある時私の云う通りに真似をしているお子さんを見付けました。語氣の加減も同じように云います。私の事ばかり

でなく、交渉のあった友達の云う事も口の中
でつぶやいて居ました。これは癖かも知れま
せんが、私には、何かこの時代のお子さんの生
態である様な気が致します。家庭とはなれて、
始めて見る社会に対しての、好奇心と、それ
等を受取ろうとする姿だと思いました。お子
さん達は口に出して云わなくとも、このよう
な態度で、毎日登園するのであるならば、幼稚
園の環境が如何に大事であるかをつくづく感
じました。その環境の一つである先生(私)
の態度は、考えれば考える丈慎重を要するも
のと思ひます。まだ何色にも染まらない清ら
かな白色を、個性のある色とりどりに染めて
行く事は、大変な事であり、又楽しみのある
ものとしてじみ感じました。

(東京・若葉会幼稚園)

〓 御意見を

伺って

堀合文子

今、諸先生の三歳児を保育しての種々の御
体験を読ませていただきました。

まだ母親のお乳から離れ切れないあの三歳
児を幼稚園に迎えた先生方は皆このようにお
感じになる事でしょう。小、中、高の先生方
から幼稚園児をみたら、何と幼いとおもう。如
く幼稚園の中でも五歳児をみていた先生方は
何と幼いと、これと同じ感をいただきます。

その幼い三歳児をあの団体生活に迎えた時
に、先ず考える事は、先生方のように、如何
にして迎えたらよいか、どのような環境を整
えてむかえたらよいかという問題が一番先に
考える事でしょう。どうしたらよいかはその
次でしょう。五歳児、四歳児を四月迎えるの
とはやはりそこがちがっていなければならな
いと思ひます。先生方の所ではいろいろの関
係や事情で他の年令と一緒に人数も少いよう
ですが、やはり一組独立して十五人から二十
人位までが人数としては理想のようです。

私の方でも数年前から一組独立して三年間
保育をいたしており、私も昨年で二回経験い
たしました。まだまだ経験も浅いのですが何
かのお約にたてばと思ひ出してみましよう。

四月三歳児を迎えるために私も先生方と同

じように考えました。先ず三歳児の心理学的
にみた発達段階はどの程度であるかと書物を
引き出して概観を画いておきました。

次に、三月までは五歳児の先生であつたか
ら、自分というものを三歳児の先生に変えて
おかねばならなく、それにはどうしたらよい
か。と、自分の反省をいたしました。三歳児
の先生とは、もっともっと外観からして、や
さしく、にこにことして、みるからに三歳児
の先生、とみえる人に先ずならなければいけ
ない。幼稚園の先生は、たとえ五歳でも四歳
でも先生はこの事は必要ですが、もっともっ
と言葉には言いつくせぬ態度というものが是
非必要であると考え、幼児をどう扱う前に先
ず外観だけでも三歳児に適した先生になつて
迎えてあげたい。これはとても大事な事だと思
ひます。言わなくても解っているような事
で仲々むずかしく又大切です。環境の一つと
しての先生がやさしくにこにこことおだやかな
よき態度でむかえてあげれば幼稚園にも安定
感をはやくもつでしょう。又むかえる時ばか
りであとはこわい顔をしていてはだめです
ね。先生に安定感や親しみを持たなければそ
の上に立つ教育が何もない事はよくもう御承

知の事と思えます。

この二つが大きな目にもえぬ準備で、次は部屋の環境の事です。特別に、家庭との差がないように。でも学校形態の保育室ではやはり家庭とはちがいます。がその中でも黒い黒板には親しみのある絵をかいておくとか、ままと、遊具、カーテン、テーブル掛、花等々すべて目にとまるものの色彩や大きさを三歳児むきにかわいらしく美しく又家庭と似たような遊具をおくように考えなおしました。遊具の数も人数より少し少ない程度でいつもより多い目に用意しておきました。

以上の事は皆四歳児でも四月には考慮される事ですが又四歳とはちがった、三歳児に適したという意味で更に考慮したのです。

この事が大きな準備で三歳児を迎えたいわけです。

迎えてみると先生方の幼稚園と同じにいろいろの事件がおこりました。が、この一年の大きな目標は

○健康で幼稚園の団体生活に馴れ、友だちと仲よく遊べるように。

○基本的習慣をつける。

この事だけです。その他の事は何も目標を持ちませんでした。極端にいえば、先生は一年間よく遊んであげればよい。友だちとよくあそべればよい。

これでよいと思えます。但しこの遊びには子守のような態度ではない事はよく理解していただけたらと思えますが。

三歳だから三歳なりの製作を、三歳児なりの歌をと考えます。それは三歳児なりの事は何事でも必要ですが、三歳児には製作、音楽リズム、お魚かき等々を指導するという四歳児や五歳児と同じような目的は、いっさい必要ありません。

四歳児も先生中心の時期ですが、三歳児はもっともっと先生中心の時期で又必要なので。幼児の遊びをより豊かにするために、先生は製作したり、音楽リズムをしたりして遊ぶでしょう。又幼児も先生が作った玩具で遊ぶでしょう。

その時三歳の幼児は遊びとしてその一部へ参加するでしょう。それでよいと思えます。

次第に友だちと遊べるようしむけていくのですが、先生は友だちと遊んでいるからよい

わとか友だちへ遊んであげてとおしつけたからよいわとすましていてはなりませんね。三

歳児の先生は、よく遊んであげる先生でなければならぬと思えます。もう大分遊べるようになったからもうよいと離してしまう時期でもありません。その幼児の遊びの進度によって、時にはリードして遊んでやったり、時には三歳の友だちとなって遊んでやったり、時には一緒に遊ばなくても側で遊んでいてあげるなど、その時々々に適当な位置で先生は常によく遊んであげる事が大切です。

生活指導の方は基本的習慣がある程度できればよい。手洗を一人でする。おべんとうを一人で食べる。衣服の脱着がある程度できる。この三つが一年間でできればよいので、又その他幼稚園生活をするのに必要な習慣がその園によって種々ある事でしょう。それができるようになればよいと思えます。

先生方のお話にもあるように、個人指導の場が特に三歳児は多いのですので、先生は仲間忙しいのです。二十人の母親になったように、その他世話が仲間大変です。くるくる動きまわって、世話もしなければ又遊ばなければ、又指導もしなければと三歳の先生はとて

も忙しい毎日です。先生が動く事により幼児はその中に何か得るものを持つので、四歳五歳でもそうですが、母親と同じなのです。

一年どうやら経って三歳児の一年間がどういう意味があったか反省してみました。先ず四歳児に新しく入園して来た幼児との差を質問紙によってしらべてみました。

結果としては差は全然なく、基本的習慣の方はリードしていましたが遊びや遊具の使用の種類の点はちっともちがいませんでした。

で、私が考えたのは、これでよかったと先ず安心したのです。ちよっと考えると幼稚園へいっている効果がどんなにかあらわれなければと考えますが、家庭での一年の人と差のみえなかった事は、私共が家庭的にと努力して来た結果だとうれしくなり、これで三歳児の保育はよいのではないかと考えました。

保育の効果はむしろ五歳児の時に現れるのでこれからの将来がたのしみです。

これは私が経験した事より打出した事で、まだまだ研究しなければなりません、三年間すれば幼稚園ずれがするとかも言われますが、決してそんな事はなく、三歳児から教育

された人の方が種々な方面で深いよさがあるという事、人格的にもすぐれているという事は、今の私でも確信がもてると思います。三歳児の保育がもっともって研究されて、理想的にされれば幼稚園教育もどんなにか徹底できるでしょう。が、適した保育としなければ却って逆効果にもなるので、私共はよくその点考えねばならないでしょう。将来の何かの約に立てば幸甚です。

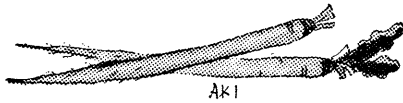
(お茶の水大付属幼稚園)

—— 最高 の 執筆 者 ——
優 秀 な 内 容 ——

幼 稚 園 真 諦	倉 橋 惣 三 著 B 6 一四六頁 一八〇円 一六六円
子 供 讚 歌	倉 橋 惣 三 著 B 6 二三四頁 二六〇円 一六六円
フ レ ー ベ ル の 教 育 学	莊 司 雅 子 著 A 5 三五四頁 四〇〇円 一四〇円
フ レ ー ベ ル に 還 れ	長 田 新 著 B 6 一九〇頁 二〇〇円 一六六円
フ レ ー ベ ル の 恩 物 の 理 論 と そ の 実 際	玉 成 高 等 保 育 学 校 幼 児 保 育 研 究 会 編 A 5 三三六頁 四五〇円 一四〇円
幼 稚 園 お 話 集 (上・中・下)	日 本 幼 稚 園 協 会 編 A 5 各三〇頁 各三三〇円 一四四円
幼 児 の 教 育 内 容 と そ の 指 導	お 茶 の 水 女 子 大 学 附 属 幼 稚 園 幼 児 教 育 研 究 会 編 A 5 二三八頁 二三〇円 一三三円
栄 養 学 の 基 礎 から 給 食 ま で	武 藤 静 子 著 A 5 二二〇頁 二五〇円 一四四円
子 供 の 宮 殿	藤 沢 宏 光 著 A 5 二〇六頁 三〇〇円 一四四円

東 都 千 代 田 区 株 式 公 司 フ レ ー ベ ル 館
神 小 川 町 2 の 5 社

導 指 樂 器 の 児 才 四



子 文 合 堀

六月研究協議会に指導した記録より抜粋いたしますので、四才児といっても私の組編成は二十二名の新入園児と、十五名の一年経験してきた幼児との三十七名の組で考えてみましょう。

十五名の前年一年間には、ハンドカスタを音楽にあわせて叩けるようにとの目的で指導したのみでまだまだ三才児なので本格的な器楽指導とはゆかず、道具の一つとして使用した程度であったから新入園児と共に指導をはじめました。

○知っている歌や音楽にあわせて拍手をする。

これは一番、基礎の事で楽器指導のみに限らない事です。が、器楽指導には特に大切に拍手する事が或程度簡単リズムもできるようにならないと楽器は与えられないと考えてもよいでしょう。楽器を与える前に充分拍手でたのしく遊ぶ事が必要でしょう。

(自由に叩く。)

(先生と一しょに同じように叩く。)

○ハンドカスタを与える。

拍手ばかりでしていてもおもしろみが薄くなってくるから或程度拍手ができるようになるとハンドカスタを与える。勿論はじめは持ち方叩き方は正しく指導する。が、ゴムの加減とか興味によっては持ち方もくずれてくるから時折訂正し、指導する程度で、持ち方が違う度に注意しては楽器遊びに対する興味がなくなるので或程度は自由に使わせる。

(自由に叩く。)

(その友だちの中より一つの叩き方を取上げて皆でそれと同じに叩く。)

(先生と同じように叩く。)

(二拍子、四拍子、を強弱なしで叩く。)

(ゆっくり。早く。叩く。)

(早い時はくぼみ打を使う。)

(二組に分けて、交互に叩く。)

○動きにハンドカスタを使う。

大人のように座ったまま或時間を過すことは幼児にはむずかしい。幼児の楽しさを増すため、自発的に参加させるには動きと共に考える事が大切である。歩きながらや動きの中に入れる事は相当むずかしいので、四才児のこの程度では歩く時に入れる位であらう。

(曲にあわせて歩きながら自由に叩く。)

(曲にあわせて叩いたり、やめたりを交互にする。)

(曲にあわせて先生の合図どおり叩く。これは簡単な合図で、歩いている時は叩かなく、止る時叩くなどこのようにして合図により変える。)

(動きのリズムの中で例えば、かわいいことりの時ことりのくちばしにするなど簡単な表現をさせる。)

○タンバリンを入れる。

ハンドカスタも大分使えるようになったのでタンバリンを入れてみる。ハンドカスタ

時のように正しい使い方を話し、交代して使用してみる。

○ハンドカスタとタンバリンを交互に組合わせる。

○鈴を入れる。

タンバリンも或程度使いこなせるようになったら鈴も入れる。がその時の進度をよくみてこれを加える事が必要で、五才になってからでもよい。

以上のような指導過程であるが、私の現在の担任幼児においてこれであるので、その時の幼児によっては無理に次々と楽器を新しく入れる必要はないと思う。

したがって、一組の幼児がハンドカスタでもタンバリンでも一応使いこなせる事がより大切で、特定の幼児のみ使用するのでない事は忘れないようにしたいものです。

楽器指導はともすると、皆一緒にそして揃わねば出来なく又効果のない遊びであるの

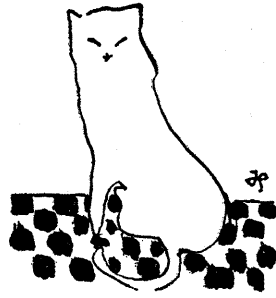
で、練習を積むようなきらいがあるが、幼稚園の器楽指導は、幼児の遊びの一つとして生活の中に打ち込み、将来幼児が自身で楽器を楽しみ、又同時にリズム指導にもなるように指導しなければならぬと思います。

四才児は一番の基礎ともなるでしょう。楽しく扱う、楽しく遊ぶこの二つをこの四才児の時に味わわせ将来、協力して楽隊あそびへ誘導できるようにしておきたいと思ひます。

三才児一年経過してきた幼児は、三才の時 は単なる遊具の一つとして指導し、扱ってきただけですがはじめは四才新入園児と同じで今ともなるとやはり新入園児のリードをしている事を見ると、何かほほえましい気持になります。新しい人たちもこの人たちに追いつき五才児になっての楽隊あそびを今からの楽しみにしております。

(お茶の水大幼稚園)

「童話化」について(五)



本田 和子

三、どのように変化して「童話」となるか。(その三)

2 「意図的変容」による「童話化」(その三)

伝承の場を「社会」にとる時、「童話化」のいない手は作家だけではない。成人のための文芸作品の「童話化」は近来特に著しく、このために創作童話の不振を招いている程であるが、これらの「童話化」をつかさどる主体は出版企業家である。

この現象は、創作童話の商品価値の低さと、成人の文芸の「童話化」、特に世界名作物語とよばれるものの商品価値の高さを示すものと見ることが出来わしないであろうか。とすれば、これはどのような

な原因によるか。

それには二つの理由が考えられる。即ち、創作童話よりも世界名作の方が作品として児童にアピールする要素を多く持つこと。今一つは、世界名作が買手である両親や教師の心をそそるネームウェアリユーを持つことである。

そして、幼児向けには「グリム」「ペロー」などの伝承童話、「イソップ」などの寓話が、年長児向けには所謂「世界名作」と称される物語の数々が巷に氾濫する結果を産んでいる。

この現象は必ずしも否定すべきものではなく、児童の世界を豊かにする上からも、成人の感動体験を子供に分つ意味からも、むしろ好ましいことではあるが、ただここで問題となるのは、出版企業家達が事業家であって、教育者ではないということである。作品自体

としては、一応世界文学史上に足跡を残すものとして相当な水準にあるものであろうとも何らかの方法でそれに改変が試みられる以上は、直接的・間接的に出来上った作品に影響を持つのは企画者であり、事業責任者である。児童への愛情が豊かであり、教育的な配慮を忘れない企業者に扱われる場合は問題はないが、もし、これが単に営利行為だけを目的とした不適当な企業者の手で「童話化」されることしたら、伝承の場が幾十万の子供達を対象とした「社会」であるだけにゆるがせにし得ない問題となる。

現状をみると、出版社によって、素材の選択にも、「童話化」する作者の顔ぶれにも、従って「童話化」の方法にも、出来上った作品にも、各々異った特徴が示されている。然し、これを大別すると、対照的な二つの傾向即ち、芸術性の強調と興味性の強調という特色がみられる。原作の芸術性を忠実に伝えようと、読者層が児童であることをすら忘れたように児童のものとしてこなれていない文章で、原作を細大もろさず翻訳してある作品がある反面、マス・プロダクションによって産み出される児童文化財には、所謂「児童もの」のつぼを心得た作家の筆によって、適度のセンチメンタルとスリルとで原作を改悪してしまっているものが多い。「童話化」においては、純粹の創作童話と異って、自由に改めることが出来、方向づけることが可能であるだけに、芸術性と興味性のバランスを出版企業者の側でいかにとるかによって出来上った作品は著しく異った色彩

を持たされる。

例を挙げよう。

「ジャングルブック」

(創元社版)

そして、むれの番をしていた子供達は、モーグリを見ると、叫び声をあげ出し、インドのどの村にもうろついている、黄色い野良犬が吠えだした。モーグリはどどん歩いていった。

「ジャングルブック」

(講談社版)

すると、牛はびゅくりして、目をみはり、牛飼いの子供達はわあっと悲鳴をあげて、すべったり、ころんだり、あわてくさって村の方へ逃げて行った。

右に引いた例は、「ジャングルブック」の「童話化」作品であるが、創元社版が忠実な訳に意を用いすぎて「読み物」としての面白みに乏しいに比し、講談社版は「児童もの」としてよくこなれた興味深い物語に化している。この場合は、両者共、良心的と一応云い得る作品であって問題はないが、興味性が優越する場合、作品は「興味をひく」「面白い」事件が中心になりすぎ、事件から事件を追い、筋の発展だけを追いかけたものとなる。一方、芸術性が強調されると作品は児童から遊離しすぎる。児童が物語を求める場合、根底にあるものは、緊張の解消と現実になし得ぬ事柄を観念的にのみ経験して様々な欲求を満足させることにあるのは、高踏的な芸術性はそれらと無関係になり易く、成人の遊びと化し易いのである。興味性と芸術性のバランスをいかにとるかということは難しい問

題である。そして、この場合に「児童の興味」というものを現在示されているものだけに限らず、指導により或いは与え方の技術によってより高い新しい興味を引き出し得るといふことを考慮すべきであろう。「子供の興味をかくかくのものに向けられる」ということは、「子供達はかくかくのものしか好まぬような読書生活、或いはお話の与えられ方をしている」と云い換えることが出来るかも知れないのである。児童から浮き出さず、成人と子供の間にずれのないような、子供の世界に定着した指導法・物語の与え方が、児童の興味をより高いものとし得ることを信じたいと思う。

芸術性と興味性の問題は、現在のマス・プロダクションによる「童話化」において重要な問題である。但し、対象とする児童層の年齢が低くなるにつれて、この傾向は幾分の異なりを示す。即ち、幼児向けに「童話化」がなされる場合には、素材として選ばれる作品自体が比較的単純な短いものである。それ故に、「童話化」の手づき如何によって作品各々が異つたものになってくるにせよ、その差は小さいのである。

例を「インソップ寓話」にとろう。「インソップ」は児童ものを扱う著名出版社の殆んどが、所謂絵本或いは挿画入り物語として世に送っている。店頭を飾るものは十指に余ろう。これらを原作に対する変容の度合に關して比較していこう。

寓話は、文祿二年に吾が国ではじめて翻訳を試みた「天草本インソ

ホのファ格拉斯」の訳者が、寓話に対していみじくも「下心」といふ語を当てたように、普遍的な真理即ち道徳・倫理・智慧などを、短い形に具体化したものである。それ故に、寓話はその「下心」即ち寓意を受容者に伝えることを目的とするものであり、文学作品としてより、むしろその目的を伝達するための媒体としての性格が強い。Arbuthnot の云を引用すれば、寓話の登場者は鳥であれ、人間であれ、それらは全て没個性的であり非人格的であって、単にある一つの教訓を伝えるための行為に従事させられているに過ぎないのである。「高慢な兎」の「兎」は、一匹の動物としての「兎」ではなく「高慢」以外の何物でもないのである。

このような寓話の性格からみて、それが「童話化」される場合は最も変容され易い箇所として次の二点が考えられる。即ち、その一は寓意である道徳・倫理の方向、智慧の呈示のしかたであり、他は登場者の扱い方である。

道徳・倫理が原作に忠実に同一方向を指し示しているか、或いはどのような方向へどう改められているか。登場者の非人格性が消失し、子供の同情・共感を誘うように人格化がなされているのではないか。

この二ヶ所に焦点を当て、この二ヶ所に關する変容度を見るために次のような手続きをとった。

原作には、必ずその作品の寓意が、その末尾に明示されている。

それと、「童話化」作品から汲み取れる教訓が同一であるか否かを比較していく。次いで両作品の登場者及びその動作・行為を敘述・形容するために用いられている語句、特に外に現れない行動を形容する語、例えば感情の状態を示すもの、などを比較して、その登場者の描かれ方をみた。

一例を掲げよう。有名な「狐とぶどう」をとる。但し、こゝでいう原作とは、ギリシヤ語で集大成されている「イソップ寓話集」からの訳という意味である。口から口へ伝わっていった古い時代の物語であるから、著者自身の原作というものはない。

原作の寓意
(岩波文庫文に
よる)

よる)

「非力の口実に、時機を使う者がある。」

「イソップ絵物語」
(講談社)

「まけおしみをす

な

「名作イソップ
二年生」
(宝文館)

「まけおしみをす

な

右に示したように教訓に関しては、原作と異なり、明確に呈示された教訓の部分が「童話化」作品には含まれていないが、作品から汲み取れる教訓を比較する時、次のような相異に気附かされる。

原作の教訓が、きびしい人の世を生きていく上に厳として横たわる真理として、人生の知恵として呈出されている場合にも、「童話化」においては、積極的に行動に働きかける行動規範として感じとられるような含まれ方をしているのである。「非力の口実に時機を使う者が多いのは世の常だ」といった呈示に対して、「負けおしみをす

るな」と児童の行動を積極的に戒めている。

顕著な例を今一つ挙げよう。「腹のふくれた狐」と題する一話、食へすぎて木の洞から抜け出せなくなった狐の寓話に関して、原作の寓意は、「困難は時が解決する」となっているに對し、「童話化」作品から汲み取れるものは「欲ばるな」「軽率に振舞うな」という戒めである。

これは、「イソップ寓話」の成立当時の社会状況及びそこに生活した庶民の前に呈示されるべき教訓と、現代の幼児達に与えるための教訓とのちがいを反影するものとして興味深い。

然し、教訓が幼児に与えられる場合に、ともすれば直接的な行動の規範・禁止・指示などの形をとり易いことは一つの問題であると思われる。

次に登場者の扱い方を比較する。先の「狐とぶどう」の例を引こう。

登場者の形容、動作・行為の敘述

原 作	「イソップ絵物語」	「名作イソップ二年生」
<p>餓えた(狐) ↑ ↓ お腹のすいた(狐) ↑ ↓ のどがからからにか</p> <p>一生懸命に</p> <p>がっかりしました。</p> <p>すました顔をして。</p>	<p>わいた(狐)</p> <p>大喜びです。</p>	<p>立ち去りなが ↑ ↓ のこと立ち去り ↑ ↓ とほとほと歩いてい</p> <p>りました。</p> <p>食べたくてたまらな</p> <p>いの平氣そうな顔</p> <p>をして。</p> <p>とほとほと歩いてい</p> <p>きました。</p>

「童話化」作品には、登場者の行動や感情体験などを詳細に描写してあって、そのために登場者は原作にない活き活きた生命を与えられ、人格化されている。即ち、狐は喜んで、がっかりしたり、とぼとぼと立ち去ったりする。その行動が生きたものとして受容者に親近感をもって迎えられるのである。

これは「イソップ」の「童話化」作品全般に関して云えることである。

以上のように、幼児を対象とした「童話化」においても、原作に對する可成りの変容がみられる。然し、それは俗悪化されたり、興味本位に改悪されることを意味せず、幼児に親しみ易く、共鳴を得易いための改作であり、幼児の生活指導により適した形への変改である。この点は、どの出版者によって作られたどの作品にも共通していて、そのために作品相互に大きなちがいが見出せないのである。もし、ちがいが生じるとすれば、その絵本が文字のためにどれだけのスペースを呈供しているかによって起ると云える。

年長児を対象とした「童話化」作品に比して、幼児向けの場合には、同一原作の「童話化」作品相互の差は、質的にも量的にも極めて少い。それだけに幼児を対象としたものは無難であり、甚だしい害を及ぼすものはみられないが、それと同時に、どれをとってみても大同小異、余りにもステロタイプのものが多いとの感を免れ得ないものである。

3 「童話化」の背景

子供達は、物語の受容者として意図せずにそれを變化させていく。その受容者たる子供が、物語を把える「意味的枠組」には、その時代の社会的文化的背景が投影される。

伝え手の役割をとらされる母親、祖母達は、物語に道徳性を附与し、物語を通しての児童の教導を意図するが、附与される道徳の規準及び教導の方向を規定するのは、その母親達の住む社会であり、文化の形態である。

作家が芸術的価値に重きを置き、文學觀を基礎として「童話化」を行う場合も、その芸術觀・文學觀を支えるものはその当時の社会思潮である。

殊に「童話化」においては、既成のものを素材としそれが組み換えられて新しい粧いの下に児童の中に入っていくものである。新しい衣裳は時代に織りなされるといえよう。

二・三の例を挙げよう。

「浦島太郎」が亀の報恩譚の形式をとったのは室町以後である。上代の風土記にみられる「浦島太郎」は、亀が婦人と化して浦島とちぎる所謂「動物掣入り・嫁入り説話」の一つであった。これが平安の後期に仏教思想の因果応報と結びつき、更に封建治下の鎌倉・室町期に、報恩譚としての型を整えたのである。

室町期に産み出された「鴉鷺合戦」「魚鳥平家」の類は、従来数多く存在した禽獸譚を以て、當時を風靡した軍記物語から一種のパロディーを作り出したものである。これらの物語は室町期の世相と、古伝秘説が権威を保っていた当時の民衆の生活をよく反映している。

物語の変容に現われる時代差をみるために、次のような調査を試みたことがある。即ち、約三五〇名の男女大学生とその両親を対象として、彼等に昔噺を児童に与える際に特に注意して意図的に改める部分を記して貰った。

被調査者の解答は一二の項目に分類されたが、甚だしい時代差のみられたのは、「好戦的・殺りく的な箇所を平和的に改める」という項であった。学生側の解答ではこの項の頻数順位は第二位であったが、両親側は第九位であった。戦前に物語を与えた両親の世代と戦後の人である学生との時代的差異を示す例と云えよう。但し、この場合、両親側の記述が過去の経験であるに比し、学生の記述は、単なる仮定にすぎない。実際に行われる行為の面では幾分かのずれがあるものと思われ、物語の変容に現実作用するのは、この「行為」である点に問題があろう。

社会的背景が「童話化」の方向を明確に指示している例として、新中国の場合が挙げられる。新中国の新しい国語教科書に、グリム説話中の「狼と七匹の小山羊」の翻案が収められているが、それによれば、狼にだまされて六匹の小山羊が食べられてしまう原作が、

狼のたくらみを見破って無事に自身を護る童話に変容されている。これは、現代の中国の子供達に、社会をリアルに見る目を育てさせ、生活の智慧をみがかせるといふ意図の下になされた改作であるといふ。新しい社会が、古い物語をして新しく粧わせた例であろう。

このような事実から、ある説話、ある小話の「童話化」作品に關して、それが現在みられるような童話型に完成されたのは、どの時代に属するかを考える必要が認められる。作品の成立に作用した時代的背景を知ることが、その作品の性格をより明瞭に把握するに役立ち、更に、その作品を児童に与える実際の場面において、配慮の資となるであろう。

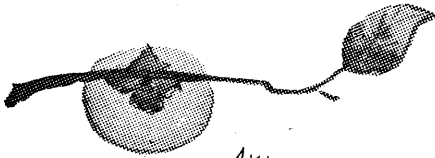
更に、社会的背景は、変容の方向を規定し、作品の内容に投影されるばかりでなく、「童話化」される素材の選び方をも規定する。ある時代に、ある種の物語が、おびただしく「童話化」されるといふ現象は、そのような作品を「童話化」の素材として取り上げさせる社会的な力が作用していたことを示すものである。

例を引こう。鎌倉末期に、安寿・津志玉型の作品が数多く「童話化」されているが、戦乱の続く不安定な社会と、親権の絶対であった当時の文化とが、「人身売買」とか「身売り」とかを主題とし、「親子の再会」を扱った物語を、児童の世界へ送り込ませたものであろう。明治初年におびただしく世に出た「海洋もの」の「童話化」も、海国として北すべきか南すべきかと論議されていた当時の国家発展策を反映する現象である。

(未完)

『昔話とこども』に見られる時代の推移

——特に戦後の動きについて——



Aki

室 谷 幸 吉

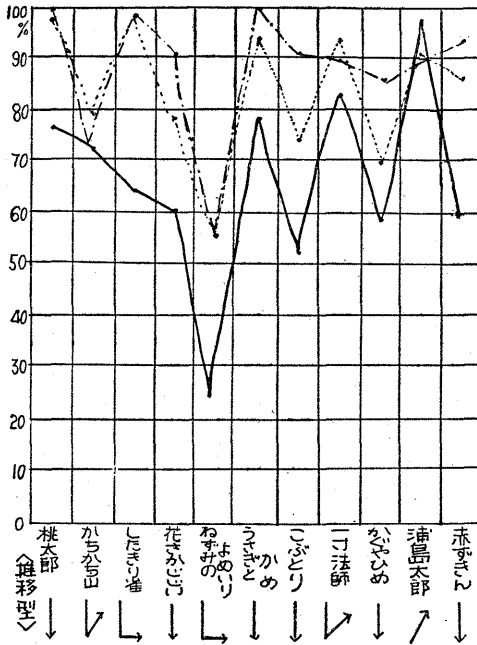
日本五大童話（昔話・お伽噺）がなになのであるか知らない人が、今の若い人たちには多い。それらの人が、ほどなく父となり母となった時、愛児に、「古くから語りつがれ、言い伝えられてきた民族の遺産」である昔話を、現在四十年代五十代或はそれ以上の年輩の人達が、かつての幼い時期に、父や母や年よりたちから、語り聞かされて、コードモ心にしみこませた、そのようには、語りつき言い伝えることが、きわめてまれであろうと容易に想像される。

うる覚えのものは、うる覚え程度にしか伝えられないし、知らないに至っては伝えるすべもないわけである。また、たまたま子供らと身近にふれ合い、「語り」を通して心と心との同質化をはかろうと考える殊勝な人があっても、時間的・経済的に、いよいよ多忙さを増してゆく社会生活という大環境が、阻止的条件となつて、その希望をやすやすとはかなえさせないであろうことも、一面、容易に想像される。（都会の家庭に於て一そうこの傾向は強い。）

ところで長い年月にわたり、歴史の洗礼を受け、民族の魂をしみこませ、なお今日、生き永らえている数々の昔話は、コードモらの魂の生長・成育のために、欠くことのできぬ尊い資料でもある。民族的、或はもつと広く人類一般としての「文化遺産」と目される数々の昔話が、コードモらの心に影響を及ぼすその広さ強さには、はかりしれないものがある。

昔話は、文字通り、コードモらにとつての「心の糧」である。すぐれた滋養素である。昔話の世界の中で、コードモらは、深く広くさまざまな人生の智慧を、磨き惜つていく。生きる上での正義や正直・または努力・勤労・協力・同情・忍耐等の正しく生きるために必要な態度や、人生を明かしたのしいものにする実際的な方法までも、コードモらは昔話を通して学びとる。昔話をヌキにして、幼い子供らの効果的な教育は到底考えられない。昔話こそ、コードモらにとつて、重要な心の糧であり、楽しみであり、生きる上での心のよりどころなのだ。幼児にとつての「古典」であり、人間にと

〈第1表〉「話をどのくらい知っているか」の対比表



つての不滅の遺産である昔話に、現代の子供達は、どのような機会に、どのような形でふれていられるか。昭和二十四年から八年間にわたり、戦後の子供たち（小学一年への新入児）

そう古くない、近い過去の時期までは、こども達は、昔話をききとる形として、主として母親やとしより達から「語り聞く」という手だてをもっていた。子供たちは、母親や手空きの老人たちに『夜語り』として昔話をせびつたろう。また母親や、愛する孫に添寝するじいさん・ばあさんは、子供が寝つくまでのひと時、寝物語として快く耳ざわりのいい音声を子供らの耳に送りもしたろう。こうして語り手の口から聞き手の耳へ、語り手の心の深さや居ずまいをそのままいませで、豊かに伝える素朴で強力な直接的伝達の形が守られつづけてきた。

〈第2表〉

伝達指数の総括対比

年度 伝達方法		昭和28年	昭和31年
		図書による	絵本 単行本 教科書 小計
紙芝居 人形芝居 幻灯 映写 ラジレ テレ 歌劇 す 以上9類	芝居	64.3	127.8
	芝居	4.6	4.8
	灯画	26.5	29.7
	オビ	3.6	—
	六	21.0	4.8
	小計	—	—
	六	19.8	—
	六	24.6	4.8
	小計	3.6	—
以上9類小計		168.0	171.9
幼稚園の先生		354.1	327.3
家庭人による	母	372.8	282.6
	父	66.8	134.4
	祖父母	60.9	55.5
	小計	500.5	472.5

男女延二百五十人につき調べて得た結果を一応まとめたものである。なお児童は、主として東京山の手に住む中流家庭のものであった。
ここに集計した童話は、日本古来のもの十・外国のもので、日本古来のものの中『ざるかに合戦』が加えられていないが、それには特別な意味はない。

そしてそういう授受の行われる場所は殆ど家庭であった。ところがそういう事情は、世間の移り変り、文化の進み、人間の知恵の高まりと共に、変容を余儀なくされて来つつある。今日のコードモたちは、母親による寝物語や、じいさんばあさんからさきく炉辺語りという形——往々古めかしい形式である、半ば茶化されて言われる昔の形式よりは、映画であり、テレビであり、ラジオであり、或は紙芝居・人形芝居・劇・幻灯といった形、そしてそれ以上に絵本や物語本という文化形式を通して、「お話」に接触するようになった。

人と人との直接接触ではなく、人が考えて作り出した「ひとつの組み立てられた物」を通して、間接的に人間に接触するという知得形式上の変化がここにある。それぞれの表現様式には、それらに応じたさまざまな機制が内に働いているわけで、それらの使い方による効果が、昔の『語り方』に払われたと同様の関心のもとに研究されなばならぬこととなった。

この間の事情を、第2表の「伝達指数の

総括対比」がよく物語っている。子供らは何を通してお話をしったか」をみると、昭和二十八年では、第一位が絵本・第二位が単行本、その他の方法によるものは、この二者とは比べものならぬほど大はばの開きで低下し、三位は紙芝居・四位は幻灯、ついで劇・ラジオ・歌等の順になっている。

三十一年度では一位が絵本でこれは変わらず、紙芝居が二位にせり上って、単行本(三位)と順位が入れかわり、以下幻灯・劇・人形芝居となっている。

そしていずれの年度でも、絵本・単行本をふくむ図書による伝達が、他の方法によるものの総和の約八倍の強さ広さをもっていることがうかがえる。図書の果している役割の大きさには今更驚くばかりである。またそれ故にこそ、子供のために一層すぐれた、良い絵本や単行本の発行が望まれる所以である。

同時に他方に於ては、紙芝居・映画・テレビ・ラジオ・幻灯・人形芝居等の図書にやらない方法——とりわけ子供の活動的な欲求にマッチする方法について、一層活発

な開拓と前進とが図られねばならぬことも、この表は強く示している。

伝達形式の変化は、伝達が行われる場所や、伝達に関与する人間の変化を伴っていた。比較的近い昔まで、家庭を主要な舞台として授受が行われていたものが、最近では、家庭から広い外の社会へとび出すことになり、或は劇場へ映画・演劇・人形劇で、或は街頭へ紙芝居で、そして、よりひんばんに幼稚園へ保母さんのお話・絵本・紙芝居・幻灯で行われるようになってきた。

家庭というワクをのりこえたことによつて、今まで母親や老人たちがつとめていた役割を、俳優や声優、紙芝居業者、保母さん達が荷うことになってきた。

このことは、同じく第2表の下段の数字がよく物語っている。幼稚園の先生を介しての伝達が、家庭の母親と同数か(昭和28年)或はそれを上回って(昭和31年)いること。

しかし母・父・祖父母をひっくりかえり、

家庭人を通しての伝達が、幼稚園の先生を通してのそれより約五割方多いということ
は、古来の形である『語り伝え』の推移の上から注意深く見られねばならぬものであ
つて、こうした形は、長く失われ・忘れら
れてはならぬものだと思う。

調査の結果を通じて明らかになるのがえる
ように、こうした「昔話の取得形式」の入り
乱れは、今後いつそうはげしくなるだろ
うことが容易に推測される。

現在の段階では、絵本へ主として子供が
自主的に見る」と、一般の単行本へ子供は
自立的に読めないで、父・母・年より・
保母さん等に読んでもらう」の果している
役割の大きいことに、重ねて注意せねばな
らぬ。(このような「読み合い」形式の拡
大は「語り合い」形式の縮少を伴うものと
して理解される)すぐれた絵本・より整っ
た物語本の出版が強く望まれる次第だ。

映画やテレビ・ラジオによる伝達は、今
後一層意図的に強力に進められ、拡大方が
図られていくであろう。そういう時代的な

使命を、それらのものが荷っているように
見うけられる。

しかし、こういった「物」を利用して、
比較的容易に、しかも効果的に進められる
方法に併行して、素朴なまなめるい方法と
は言われようが、「口から耳へ」の「語り
もの」形式——つまり語り手と聞き手が直
接にふれあう方法も、ひんばんに採りあげ
られ、思慮深く研究が進められねばならな
いものであろう。

第1表下欄の推移型とは、子供らの知得
状況が、年と共に高まっているものが↓
(順型)。その逆に知得率が低下している
ものが↘(下降型)・また一度向上し次い
で低下しているものが↘(上昇下降型)。

上昇後停滞しているもの(停滞型)とい
う風に、知得状況の推移を、一応型に描い
てみたものである。調査十一話中、順型(向
上型)が、桃太郎・花さかじい・うさぎ
とかめ・こぶとり・かぐやひめ・赤ずきん
で、中でも桃太郎・うさぎとかめは、それ
ぞれ一〇〇%(昭和31年)に達している。

知得下降は、浦島太郎で、下降的な浮動性
のあるものは、かちかち山・一寸法師であ
つた。

ついでであるから二・三、類縁指数を記
しておこう。(以下すべて%は知得指数)

▽「ねずみのよめいり」の経路指数(二四
年度)は、本によるもの一二・四%、母
によって四・一%、おばあさんから四・
一、おじいさんから二%で、混乱期にあ
つた戦後の社会情勢がここにもうかがえ
る。

▽「シンデレラひめ」八八・三%(二八年)
八二・四%(三一年)

▽「文福茶釜」七四・二%(二四年)、八〇
・五%(三一年)

▽「大江山」一〇・四%(二四年)

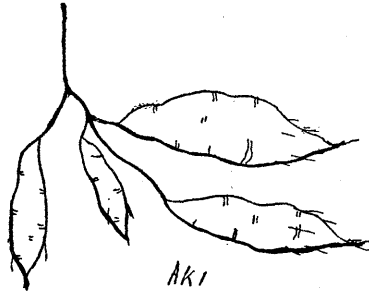
▽「ジャックと豆の木」五五・九%(二四
四年)

▽「長グツをはいたネコ」四二・一%(二
四年)

▽「マッチうりの少女」六五・二%(三二年)
(東京・明星学園)

自然保育の

実験報告



東京
目白幼稚園

序

人間の各時期の好ましい発達には、前段

又遊びのグループの人員も、年少な者程少なうございます。グループの編成は毎日干差万別で、子供はその時のメンバーによ

階の十分な成熟が条件です。幼児の生活は「遊び」であり、幼児期にたっぷり遊んだ子供は学校に入ってから、又好

ましい知的発達を遂げると思っています。自然保育は幼児の自然の行動、傾向を活用して幼児教育法としたもので、幼児の自主的な性格形成を促進致します。次にその実験報告を申し上げます。

(一) クラスの解体

幼児の要求は少しでも多く色々な年齢や性質とふれあい、見聞を広くする事にあると考えまして、クラスを解体しました。此の結果智能の遅れた者は小さい子と遊び、クラス分けがない為これをおかしく思う子供がありません。

て、自分の役割を多種多様に学んでおりません。

(二) クラス解体後のカリキュラムに就いて

幼児の学習は子供の自然学習に任せるべきだと思います。そして一年を通じた園全体の保育計画を立てて、カリキュラムは環境に折り込まれ、幼児の自然学習の機会を捕えて保育が誘導し発展を助ける様にしてあります。従って幼児教育は個人保育でなければならぬと考え、クラスの解体も年齢以上の個人差を認めた結果によるものがございます。

(三) 遊び場の仕度

自然学習には環境の整備が条件でございますので、クラスの解体と共に屋内に凶の如く九つの遊び場をこしらえまして、何時でも子供が自分から遊べる様にして置きました。各部屋の毎日の工夫の中に私共のカリキュラムも半ば表現されて、いつでも子供を誘っているのです。

(四) 自主的な自然学習の第一歩

此の環境にあって、子供達は創作以前の
実験の時期とでも申しましょうか、折紙を
ただ切りこまざくとか、絵具の滲みあいを
楽しむとか、ホールを一寸走ってはころが
り、又一寸走っては転がって、十五分以上
も遊ぶ等各自の個性にに応じて、たつぷりと
その子の段階をほぐれた心で遊んでくれま
した。又始めて友達になる時も、二人さりの
鬼ごっこみたいな事をしながら自分で友
達を作って参ります。観察の机を囲んで七、
八人の子供が、エビガニをみています。エ
ビガニって蝦にそっくりだねえ……尾っぱ
も同じだ、長いひげだって、めだつてさあ
……」「足はどうかな？」と皆でガラスの
器の下の方からのぞいて居ます。「何故エ
ビガニって云うのかな？」「エビ・ガニ：
……じゃあないか……缺もあるし……」「そ
うだね」「これ食べられるよ」「食べられ
ないよう」「でも蝦と同じだものねえ」「先
生！これ食べられないよねー？」「さあ
……食べられるかも知れないけど……余り
おいしくないでしょうよ」「どうして？
どうして海の水ならおいしくてたんぼじゃ
あおいしくないの？」「きつと泥くさくて

おいしくないでしょうよ……先生も食べた
事ないけど……」と答えておきました。所
がエビガニが戦時中千葉県で或人が、てん
ぶらにして食べたら、大変美味しかったそ
うですが、その後わけのわからない病気に
なり病院で調べた所、エビガニによるらし
い肝臓デストマであったという話を人から
ききました。此の様に子供の自然学習は、
仲間の友達との合作の形でだんだんに友情
と共に培われるのが特徴の様に思います。

(五) 誘導保育の実際

「遊ぶ子に手をつけるな、眼を放すな」と
の諺は自然保育の要諦でございます。子
供を伸び伸びと育てる上にはあまり世話を
やいたり干渉したりしない方がよいと思ひ
ます。しかも勝れた子供になって貰うには
二つの手段があります。一つは子供が自分
で利用出来る設備及び自然学習に適した環
境であり、一つは絶間ない保母の誘導であ
ります。知らず知らずの中に子供が糸をひ
っぼられている事を意にしないで自分から
園内に入ってくる……此の誘導保育は徹底
した自然保育の場合に最も効果的であり易

いのでございます。そして、どこの幼稚園
でもなさっている此の誘導の方法が子供の
自主的性格の形成に寄与して居る点を、私
共はしっかりと自覚してこれらを行う必要が
あると存じます。知的学習の誘導の例を次
に申し上げます。寒い冬の朝、観察の机の
見事な霜柱を前にして「これ氷だよ」「氷
じゃないもん、霜柱だもん……土の所にあ
るんだぞ君」と熱心なやりとりがあり解決
がつかず、みていた保母は、「じゃあお庭に
探しに行きましょう」と持ちかけました。

子供達は霜柱のあるところをぐるぐる探し
まわって、花壇にもあった、垣根にもあっ
た、そして最後は園長先生のお庭の昨日掘
ったばかりの穴の中途のが一番見事とし
た。「柔かいところはよく出来るね」「そ
うだ、あんまり人の踏まない所にあるね」
「柔かい所ならあるよ」「じゃあ砂場にあ
るぞ」とみんな飛んで行きました。「あれ？
ないや」「ないねー」そのうち探していた
一人が「水がないからだ」と云いました。
それから霜柱とりが盛になって観察の机に
沢山の霜柱が並ぶと保母は、「みんなこれ
で何がしたいですか？何でも好きな事し

て「ごらんさい」といいました。「僕虫めがねでみたいなー」と虫めがねで見た子は「やーガラスのお城みたいだ」と云いました。女の子が「私水の中に入れてみよう」と洗面器の水に霜柱を入れるとみんな眼を丸くして「浮くねえ」とみえています。霜柱を手のひらにのせて虫めがねでみていた子は、「やあだんだん小さくなって来た」といつまでもみていました。以上の事はどの幼稚園にもある事でございますが、私共は此の様な自発活動による経験を誘導することを本領としているわけでございます。

(六)遊びの片よりについて

皆様もお気づきのように此のように保育していますとかたよって遊ぶ子供も出て参ります。それで各遊び場に来た子を簡単に記す表をこしらえて、これを参考にしながら好きな遊びや友達をきっかけとして誘導して居ります。

(七)集団指導について

自然保育にあつては、同じ興味活動をする者同志が一つの場面を作っている場合に

これを集団と名づけ、保育の指図した一つの部屋又は一つの机にいるものを集団とはみなさないでございます。従つて子供は自分の目的を得る為に必要なに迫られつつ集団を学んでおりまん。砂場でバケツを取りつこしていた子供も、製作の机に来て仕事に熱中して来ると、又違った雰囲気となり、向うの子供が、「一寸はさみ」と云うと思わず急いで渡しております。今度はこちらの子が、「はさみ」と云らと相手は物も云わずに渡して、又余念もなく集注しております。一人の子が大きい声で、「手をふくもの」と云いましたので、「御自分で取つていらっしやい」と保育の口から出そうになりましたが、隣にいた女の子が早速にとつてわたしました。こうなると同じ興味活動をするもの同志の察しと申しますか、そう云うものが此の集団を支えて保育はこれを観察し、学ばばよいという事になります。好きもの同志の寄つた遊戯の集団にも自然にお邪魔はいけないとか、代りばんこに皆の好きなものをとか、エチケットが生れるのは当然でこれを守れない子供は仲間からははずされ、又自分もついて行けなくな

ります。自然保育は幼児の興味活動が主体であるからさぞ勝手が出来るであらうと思われませんが、実際の子供の生活は決してたやすくはありません。今日は積木遊びが広くなつてホールにはみ出ししている等という時は、遊戯の丸もそだけかけて曲る等、お互いを尊重しあつて暮しております。御辨当は遊び場を片づけて食事致しますが、どの遊び場で誰と並ぼうかと、席を選ぶには相当頭を使つております。又週三回は、お話、人形劇、テレビ等全員一緒に楽しめますが、共通目的のえの興味が子供に集団のエチケットを学ばせる事は前に述べた通りでございます。自然保育の難しい点は何と云つてもあちらの遊び場、こちらの遊び場と散らばつて居る子供達の心をどうやって手の中に収めるか、と云う事でございますが、結局一人一人の子供と誠実につき合つてこれを積み重ねれば大分効果があります。

(八)自然保育の結果

此のような自由な保育を受けますと自分の行動について絶えず自分の判断が必要で

すので意志方ある人間を作ります。一二の例をあげますと、ある子供は留守番をしている時、おじいさんが吐血して急に亡くなりました。一緒に遊んでいた子供達の中には小学生もいたのですが、皆が逃げて行ったあとでその子供は、血だらけになって一生懸命背中をなでていました。近所の人が話をきいてかけつけてこれを見て、大変に驚きましたが、此の様な事は当人は平常通り目的を持って行動したに過ぎないのでございます。又この自然保育を二年間受けて今年卒業した或女の子は、夫々別の幼稚園を出た兄と姉とがありますが、姉の方は兄からいじめられた場合に始めて、母親に訴えますが、此の保育を受けた妹の方は自分の時は比較的自分で拒絶又は別な方法で処理しまして、何かの折に、「お兄ちゃん人は嫌がってもする時があるよ」等と淡々と話しますので「何だ、妹のくせに」と云えないものがあります。又自分の姉に対しても、「お姉ちゃんは、何時も急いでるから」と自分のものさしで姉とつき合い、自分の生活を打ち建てる自主的な面が上の二人にくらべて、はっきり現われておりま

す。此の様に周囲の友達や人間全般に渡って観察力が培われる点は他にも沢山例がありまして、これが此の保育の一つの特徴でもあると思います。又学校へ行っているから、二年三年と上に行く程いろいろな方面で効果があがっております。園のそばの小学校へは、年々卒業生の九割までが通っておりますが、小学校は三年になれば始めて学級委員が選ばれるのですが、今年の三年の学級委員も、七組まである各クラス毎に大分多くえらばれておりまして、何となく明るい気持が致しております。

又私共は興味活動の促進と云う点で誠にお恥しい実力でございまして、なかなか思う様な成果もあげられずしておりますが、自然保育のシステムそのものが創造活動の方法として勝れている事は、多分皆様もよく御了解いただけると思うのでございます。

最後に自然保育の人数でございますが、やはり職員が幾人いまいしょうとも一人一人の職員が全部子供を受けもっている事になりますので、理想を云えばせいぜい六、七名が限度であらうと思えます。

私共としては此の発表に当って、実験的

なデータをおめにかげられたらと思いましたが、抽象的にしかお話出来ないのが残念です。ですから果立って行った子供達をみてみますと、円満な社会人としての基礎の上に伸び伸びと成長しているのを見るにつけ、私共の保育の方法に確信をもたずにはいられません。そして私達は、この方法で邁進して行き度いと思っております。

第五回全国幼稚園施設

研究大会

会期 十一月九日(金)十日(土)

会場 名古屋市公会堂

講演・研究発表・分科会の
研究主題と小問題・その他

参加費 五〇〇円

申込先

名古屋市第三幼稚園内

第五回全国幼稚園施設

研究大会事務局

(名古屋市西区志摩町一電話笹島分局55)〇二八〇

幼児の言葉からうまれたうた

(3) 鈴木正子

① あ さ が お (5歳児)

あさがあがみ 水がほしいと ないまいる おみみをつけて

きいてごらんよ そうだちこちゃん おみみすをあげよ

解説

①

夏の日、炎天下の朝顔の力無い姿に、水をやろうと二人の相談がまとまるこれはある家庭での兄妹の会話から拾得したもの

解説

②

園庭にあるあかしやの古木の幹に穴が出来てる
そこに青蛙を発見した子供が言ったことば、

その穴に沢山の蛙の一族がいると今でも幼児たちは信じている

解説

③

夏休みあかぎ登山の折にあかぎ山行きのバスは相当な傾斜をのぼる
山につっこむというのが
実感であったのだろう

② かえるのおうち (4歳児)

かえるの おうちが ある よ

おか-さんの かえるが い る よ

③ 赤 城 や ま (5歳児)

あかぎやまが ちかついた 自動一車が やまへ

つ こむ ぞ



AKI

母親は幼稚園教育に何を期待するか

岸 本 弘

幼稚園ほど、学校と子どもの両親（特に母親）との関係が密接であり、従って母親の協力が望まれている所はないであろう。

これは極めて自然な事で、子ども達が家庭という云わば温室の生活から初めて学校という新しい一人立ちの生活に入っていくのであるから、そこには当然大きな適応上の問題が起って来る筈である。

この様な子ども達を幼稚園生活という集団教育のレールにうまく乗せて行くためには、幼稚園の先生方と母親との極めて注意深い又辛棒強い協力がどうしても必要となって来るのである。ところで母親の幼稚園教育（と云わず教育一般）に対する理解の度合は戦後とみに上昇してきたと云われている。

それではこの様に教育に対して深い関心を示して来たと云われるお母さん方は実際に子どもをどの様な理由から幼稚園にあげているのであろうか。又母親のこの様な期待は子どもが幼稚園にあがってから後も一貫して抱かれつつけられる様な類のものであろうか。あるいは又このような母親の抱く期待なり、希望は、幼稚園が子ども

を教育して行く場合の方針と合致するものなのであろうか。それとも幼稚園の教育方針と衝突する様な性格のものであろうか。このような点について考察を加えるために昨年、東京都内の十四の幼稚園の協力を得て園児の母親千四百人を対象に調査を行った。

[表 I 第]

1.	小学校入学の準備のために	50%
2.	集団教育の必要性から	31%
3.	内気で親に甘えて困るから	4%
4.	一人っ子末っ子のため友人がないから	3%
5.	買食い等の悪いくせを治すため	3%
6.	良い友人が得られるから	3%
7.	早期教育の必要性から	3%
8.	子どもの教育に自信がないから	3%
9.	子ども自身の意志から	1%
10.	工場商店街等の悪環境から守るため	1%
11.	親の義務感から	1%

(註1) これらの理由は可成り重なり合って表明されているが、より適切と思われる方に整理した。

この調査に対して解答を寄せた母親の数は八百五十人で解答率六割強であった。先ず第Ⅰ表は子どもを幼稚園にあげた理由についての調査を整理したものである。

次に第Ⅱ表は子どもの入園後、半年経った昨年十月に行つた調査のうち、子どもの変化についての母親の評価を整理したものである。

〔表 Ⅱ 第〕

1.	小学校の入学準備として大変効果をあげている……………24%
2.	社会的になり友達が出来た……………16%
3.	良い習慣、良いしつけが出来た……………13%
4.	情操が豊かになり成長してきた……………9%
5.	食事が進み健康になった……………7%
6.	遊戯や歌をよく覚えて好い子になった……………9%
7.	言葉が悪く乱暴になった……………13%
8.	見栄を張るようになった……………1%
9.	人のまねを好い悪いのくべつなくして困る……………5%
10.	うそをつくようになった……………2%

〔補表Ⅱ第〕

1.	子どもは好ましい変化を見せた……………80%
2.	良くも悪くもなかった……………15%
3.	余り変化なく失望した……………5%

又第Ⅲ表は母親の幼稚園に対する希望を整理したものである。

そこでこのような調査の結果を持って、それぞれの幼稚園に再び伺い、直接に園児の教育にあたっては園長及び先生方に会って色々とお話を伺ったわけであるが、その結果をも折りまけて二、三の問題点について述べてみよう。

〔表 Ⅲ 第〕

1.	もっと字を教える等入学準備に力を入れて欲しい……………45%
2.	歌や絵がうまくなる様発表力を養って欲しい……………19%
3.	悪い言葉を使わない様注意して欲しい……………11%
4.	しつけをもっときびしくして欲しい……………7%
5.	完全給食を望む……………5%
6.	悪いくせにもっと注目して治して欲しい……………4%
7.	子どもを公平に見て欲しい……………3%
8.	クラス編成や始業終業時間を合理的に考えて欲しい……………3%
9.	通園の途中の交通にもっと気をつけて欲しい……………2%
10.	設備を良くし先生をふやせ……………1%
11.	長い眼で子どもの成長を見て欲しい……………1%

(註2) 解答を寄せた八百人のうち希望を述べているものは三百八十人である。

① 幼稚園の教育はもっと小学校入学のための準備教育をすべきであるという事について。先ずこの三つの表を見て直ぐに氣のつく事は、母親の関心が小学校入学の準備という点に集中している事である。

勿論現在では子ども達は総て学令期に達すれば、必ず小学校にあらなければならない様に義務づけられているのであるから、幼稚園教育もそれを予想して続いてくる小学校の教育と衝突したり、小学校で行われる教育に対して逆効果を与えるような教育をしないように注意しなければならぬ事は自明の理であろう。

そして母親として自分の子どもが小学校に入った時に人後に落ち

ないように柔な気持で学校の生活に乗って行けるように、又あわよくば人並みすぐれて良い成績をあげるようにと望むのは当然の事。

従つてこの点について非難されるべき点はないであろう。然しながらこのような母親の要望が現実の幼稚園教育に向けられる時、そこには幼児教育の立場からゆるがせに出来ない問題が出てきている。つまりこのような母親の期待の多くは第Ⅲ表でも明らかによろしく、実際には簡単な続け書き算数などの手ほどきを幼稚園に於て既に行うべきであるという事なのである。

これに対しては、現在では小学校に於てすらもその一、二年生時代はまだ幼児期の延長として遊びを中心とする生活、つまり学校という一つの社会生活への滑らかな導入という点に重点が置かれるようになってきており、ある小学校等では既に本格的な算数等の学習は少くとも四年生以後になってまとめて行った方がより効果的であるという説が現実にとり入れられているという例を先ず想起させる事が必要であろう。簡単な算数にせよ、又読み書きにせよ子ども達が必要としていないばかりか、受けつけようとしないうち、これに無理矢理につめこもうとするのは、まだ母乳のみで育てている乳児にすみやかな成長を期待するという間違つた親心から、無理矢理にオカユをつめこむようなもので消化不良を起すのは必定、害あって益のない事である。従つてこの点については子どもの成長を無視した母親のせつちかな要求に対して、幼稚園の先生方から幼児期に

は幼児期独自の教育目的、つまり、幼児期こそは一人の人間の基本的となる性格形成が行われる大切な時期であるという事実をもっともつと知つて欲しいという要望が出ていた。

② 言葉が悪く乱暴になったという事について。次に第Ⅱ表と第Ⅲ表を見て氣のつく事は、幼稚園にあげてから子どもの言葉が悪く乱暴になったという考え方であろう。

これは大抵の幼稚園で大半の子どもについて母親の口から一度は表明される点である。これは一つには家庭という大人に守られた世界で使っていた言葉と子どもだけの世界で使われる子ども自身の言葉との相違の問題である。そして又色々な家庭や色々な家庭近隣の社会で用いられていた言葉が一言にはき出され、物珍らしさから直ぐにこれを吸収してしまう子ども達なのであるからある意味からすれば、子ども達の使う言葉の数がそれだけ豊富になった事にもなっている。又大人のとりすました言葉からの解放であり子ども達にとつてもつと解り易い、もつと意志の伝達の可能な言葉を獲得した事になっている場合もあるのである。勿論悪い言葉は排斥されなければならず又我々の国語が美しい情緒をたたえたものになるように心がけなければならぬ。それと同時に重視されなければならない事は、無意味な粉飾からときほぐされた簡潔な言葉の奨励であらう。

次に動作が乱暴になったという点についても多くの場合、今迄経験もしなかつた子どもばかりの集団生活に入つて、物珍らしさや嬉しさの余り、身を持す事が出来ないであばれたり、粗暴な行為に走

る場合も実際に多いのである。従つてそのような集団生活に対する好ましい導入の過程をお行儀の良い行為の強制に依つて出鼻をくじくような行為が母親にとつても喜ばしい指導方法であろうか。

乱暴といつても他人に危害を加えるような場合にはとりわけ注意深い指導が必要であるが、成長期に在る子どもが大人のようにおとなしくしていたのでは却つて将来が思いやられるのである。

所でここで一寸ふれておき度い事は、よく母親の中には誰々と交じわつたから悪くなつた、誰それとは遊ばせないように注意して欲しい等という要望を出す人がある。これには甚だ的はずれた見方をしている場合もあるが、的を射た適切な考えを表明している場合も決して少なくない。従つて幼稚園の日々の指導に於て甲には乙を近づけるようにし、丙には甲をなるべく近づけないようにすると云つた案配に、色々と子どもの交友関係を気を配つて行く事は、先生の大切な役割となつてゐる。ただここで大切な事は子どもの要求や興味に無頓着にある関係を強制する事に依つて、表裏のある子どもを作らないように充分に注意する事である。

③ もっと歌や絵がうまく歌えたり、書けるようにして欲しいという要望について。

これは小学校入学準備の頃とも重なりあふ事であるが、ここでもっと他の問題にふれてみよう。第1表からもうかがえるようにお母さん方の中には、最初は集団生活になれさせるためにとか、内気であるからというバクセンとした考えから子どもを幼稚園にあげて

いる人もたくさんあるが、その後の折にふれての參觀に依つて、お母さん方の考え方も変り、自分の子どもの絵が他の子どもの絵に比べて乱雑だとか、まとまつた絵を書いていない等という簡単な觀察から、自分の子どもを何とかして誰それのような絵が書けるように指導して欲しいという要望を出してくるものである。

然しながら一人々々の子どもについて云つても、生活経験の豊富な子ども貧弱な子ども、狭い家の中ばかりで育つた子ども、一人っ子、末っ子、更には周囲の生活環境をよく觀察している子ども、觀察したものを良く自分のものとしている子ども、していない子ども等々種種様々の生活経験を経てきているのである。

このきよな子どもの育てられた性格は色々の動作や絵や歌の歌い方等の一つ一つの中に色々な形で現れてくるのである。

従つて幼稚園の先生方の役割は、生活経験の貧弱なものには豊富な経験を、觀察力の足りないものには注意力を、積極性を欠いてゐる子どもには積極性を呼び起す事の出来るように適切な指導をとつて行く事である。この様な地味な日々の努力の集積が重なりあつて、その子どもの絵は成長し、望ましい性格が築れて行くのである。つまり母親の関心はともすれば書かれた絵、上手に歌える事、云いつけを良く守る事、その様な出来上つた結果ばかりに集中し勝ちで、そのような結果が出て来る過程を無視し勝ちである。成長期の子どもにとっては結果よりもその過程に目を向ける事がより大切である。大人は往往にして大人の眼で子どもを見ようとしてゐる。

④ しつけ教育について少しばかり。

戦後の混乱に依って日本伝統のしつけ教育がくずれ去り、自由放任主義の思想に依ってしつけ教育の面がなおざりにされてきたが、最近幼稚園に於ても再びこの面についての要望が母親の側から起つてきている。これは一つには一応の落ちつきをとり戻した社会があるまともな形式を要求してきている事に依るのである。この故に新しいしつけ教育への指針が速かに構成される必要に迫られている。然しここでも大切な事は、子ども達に外形の小綺麗さやエチケットを教える事よりも、自分達が一つの社会に生きている事、社会はお互の協力のみによって進歩して行くのだという基本的な要素を日常生活の中で体得させて行くように心掛けるという事があく迄も本道だという事である。母親の云いつけをよく守るとか、あれもしてはいけない、これもいけない、これはこうしなければならぬとかいような外からの強制も時には必要であるが、子どもが守れないような多くの事を子どもに無理矢理に約束させる事よりも、守れるような好ましい一つ一つの行動を子どもが成した場合、その行為の達成がその後の子どもの行動の指針や励みになるようにして行く事の方がより効果をあげるであろう。

⑤ 完全給食を望む声について。

小学校で完全給食を行っている点については、義務教育をより完全なものにするというような関係から相当の理由があつての事であるから、幼稚園の場合をこれと同等に論ずる事は間違いである。

が、子どもの好き嫌いを治したり、家庭の貧富の差を子どもに経験させないようにする為又それだけ主婦の負担をばく事が出来るという点からも非常に望ましい事には違いないであろう。又既に給食を行っている幼稚園もある。然し子どもの成長の程度、家庭で温く保護されている幼児の性格等から見て、その好き嫌いを無視した急激な一律の給食が果して妥当かどうか、まだまだ周倒な研究や調査が必要だと思ふ。

腹をすかした子ども達が、母親心尽しのべんとうを頬ばる姿や、互におかずを見せ合つて語り合う姿等々、子どもにとつておべんとうの時間は最も楽しい一時であろう。然もこの様な瞬間が子どもの性質をうかがう点に於て又その家庭の教育状態を伺える点からも、子どもの指導にとつて大きな示唆を与えて呉れる時でもある。

以上調査の中間報告とも云うべきものとなつたが機会さえ許せば幼稚園の先生方に対するインタビューの結果をもまとめて報告したいと思つている。尚参考のためにこの調査に協力して下さつた幼稚園の名前をあげれば、

【区立】 (千代田区) 永田町幼稚園・佐久間幼稚園。(台東区) 清島幼稚園。

【私立】 (目黒区) 若草幼稚園。(大田区) 光輪幼稚園・御嶽幼稚園。(渋谷区) 代々幡幼稚園。(世田谷区) ばら幼稚園。(豊島区) 雑司ヶ谷教会幼稚園。(板橋区) 城山幼稚園。(葛飾区) 明和幼稚園。(港区) 神の子クラブ。(八王子市) なかよし幼稚園 (国学院大学教員養成所)

幼児教育における

(二)

個性の考え方

岡田正章

(3) 幼児教育論の中では

以上の如き学校教育法——幼稚園教育要領を中心とした幼児教育観において、個性の位置づけが曖昧であるのみならず、多くの幼児教育論においても、個性教育についての意見は必ずしも明確であるとはいえない。このことが一層幼児期における個性の教育を困難なものにしている。今その代表的な例を二つあげてみる。第一は個性を幼児教育の目的と考へる意見である。「子どもたちに絵をかかせましょう。のびのびとかかせましょう。そしてその中から好ましい個性をひきのばしてゆ

きましょう。」「今では個人を単位として、個性をできるだけ伸ばすことを目的としています」という波多野勤子女史の見解(同女史著、幼児のしつけ、三十四・六頁)にみられる。これに対し、個性を幼児教育の方法と考へる意見がある。「幼児期の個性を完成的にみて、指導しようとする、大きな誤謬におちいるであろう。幼稚園教育としては、個性保育といつても、個性を目的とした保育ではなく、ただか個性を方法とする保育であるべきで、幼児一人一人の個性の芽生えを見出すように力め、それをあたたかく見守り育ていくように、それに即応した保育を行うのでなけ

ればならない」

という小川正通氏の見解(同氏著、保育原理一四四頁)にみられる。個性を方法とする保育とは個性に即応する保育であり、それは幼稚園教育要領にみられた個人差に即応する保育ということもできる。然し、小川氏のいう個性は必ずしも全く個人差によっておきかえることのできないものを含んでいる如く思われる。何故なら「個性を方法とする保育」を「個人差を方法とする保育」に換言できても、「個性の芽生えを見出すように力め」とは「個人差の芽生えを見出すように力め」とはいい得ないから。自ら個性を方法としてのみ

とらえようと断言する一人の人の内部においても、個性は方法でもあれば目的でもあるように錯綜している。かくの如き見解の対立ないし錯綜は如何にして生ずるのであろうか。そして、その何れかの見解がより正しいとい得るものであろうか。

幼稚園の教育目標の中においても、幼稚園教育要領の中においても、更に幼児教育論においても、幼児の個性教育は明快な回答を与えられていない。にもかかわらず、山下俊郎氏が指摘する如く、「保育の出発点は子どもの個性にあり、またその最後のねらいも個性にある」ことには変りない。(同氏著、保育学概説、五五頁)以上の如き個性教育問題の所在の認識の上に立ち、以下、幼児期における個性を如何に考えるかについて述べることにしたい。

二、個人差と個性との違い

こうした場合、通常まつ個性とは何かという定義づけから始められる。このため我々は今日個性について多くの定義を得ている。保育要領にうかがわれた、「他のものから区分

されるという分離性と、独自の心理的生理的特性をもつという独自性」をもつものであるといういわば心理学的な定義から、「個性とは一般に個体に所属する性質であるという哲学的な定義まで、或は最も具体的な定義から最も抽象的な定義まで、その間に多種多様な定義を知ることができる。勿論個性を定義の上で理解することも必要であるが、それのみでは、個性の教育が解決されないことはさきの問題の所在の項で明らかである。従ってもしここに私が、個性とはかくかくのものであると概念説きをして、その効果は以前のもので変らないであろう。そこで以下、幼稚園教育要領において取上げられた個人差と、棄てられた個性との違いを考えながら、個性というものの考え方を明らかにし、個性教育の在り方について各人が考案する場合の資たらしめたい。

1. 部分と全体

個人差といわれる場合、まつ最初に我々はつきりいえると考えるのは知能についてはないだろうか。Aという子の知能指数が一

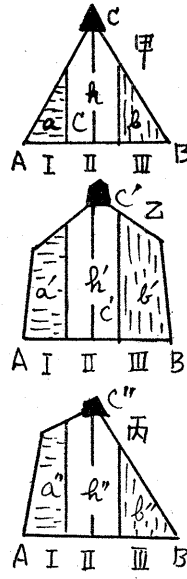
二五で、Bという子が九二だとすれば、AはBよりも三三高いという。それは一二五マイナス九二で、その差三三が算術で簡単に計算に計算できるからであろう。確かに知能については、知能検査の発達によって個人相互間の差を発見することは容易になった。然し、果してAのもつ知能とBのもつ知能との違いは、指数における三三という量での差のみであらうか。

注意深く観察すると、Aは記憶問題では強い反応をしても空間関係を知覚する速度においては非常に遅い。これに対して、Bは記憶力の問題に対しては弱い反応を示し乍らも多くの絵の中から問題の絵を抽出する作業においては、その速度においてAよりもすぐれている。この相違は指数一二五と九二によつては、発見することはできない。この欠陥を除くため、知能検査も分析的な診断テストといい、知能を数量・空間・記憶・論理・言語等数個の部分に分析し、それぞれについてテストしようとしてきている。心理学の進歩は更に、記憶を記録・保持・再生・再認等

の作用に分析する如く、各心的能力の分析を限りなく続けていく。然し、これらの分析が進められても、その各々についてテストの結果が個人間の指数差によつて示されたならば、さきのAとBとの例の如き固有のニュアンスを無視する誤りにおいては変りがない。

他方、分析されたある特定の部分の特徴がすべての子どものもつ知能全体同様に代弁するものと判断されるならば、非常な誤りをおかすこととなる。さきのBという子の場合、多くの絵の中から同類の絵を選択する能力がすぐれているといつても、その作業を幾つかの問題について進めてゆくためには、「同類のものを選べ」という問題が記憶されていなければ、一定時間の範囲内ですぐれた反応数を示すことはできない。記憶力が如何に劣っているとしても、その記憶力に支えられて知覚能力が反応を示し得る如く、各知能的な機能は、他のすべての知能的機能と相互に支持し合い、組合わされ合い、いわゆる一つの構造の中におかれるとき始めてその子ども固有の知能的な働きを現実に営むことができる。

然るに、この構造はもと全体的な統一であつて、単なる部分要素の結合によつて構成されるものではない。今、これを例図によつて説明すれば次の如くである。



ということができようか。それは図に示す如く正しくない。何故ならば、頂点 c ・ c' に見出される知覚的特徴はそれぞれ形体を異にし、それは甲の知能全体、乙の知能

全体、丙の知能全体の形体、 Δ 不等五边形 $ABCc'$ 、不等四边形 $ABCc''$ を形作っているからである。またたとえ各知的能力の強さが等しくとも、従つて、 $a \parallel$

甲・乙・丙は共に知覚能力が他の知能的な機能に比してすぐれている子どもである。底辺 ABC は知能的な機能の種類（I・II・III）を示すもので、何れの子どもにおいても同じであり、従つて等長である。然し、各能力の間には優劣の差が認められる。機能I・II・IIIに対する能力の大きさを、甲・乙・丙の各について図の如く面積 abc 、 $a'b'c'$ 、 $a''b''c''$ によつて示せば、底辺 ABC の上に形作られる形は夫々異なる。頂点 c ・ c' ・ c'' の底辺 ABC までの高さの大小は知覚能力の優劣を示す。今、 h ・ h' ・ h'' の高さが同じとすれば、甲・乙・丙の知覚能力はすべて同様のものである

も、面積 a の形体が無限り多様であり得る如く、図形 $ABCc$ 、 $ABCc'$ 、 $ABCc''$ も無限に多様な独自の形体をなす。従つて c ・ c' ・ c'' はそれぞれ独自の機能を示し、決して一樣ではない。この統一的な全体としての図形 $ABCc$ 、 $ABCc'$ 、 $ABCc''$ は算術によつて簡単に差の求め得るものではなく、従つて個人差の乗積によつて見出されるものでもない。子ども一人一人がもつこの統一的・全体的な独自の構造こそ、その子どもの個性といふべきものである。如何に能力的に劣つていても、すべての子どもにその子供固有の個性が存し得る所以

も、個性がこのようなすべての子どもにも内在する全体的な構造に存するからである。

今まで知能についてみてきたことは、情意の面についても同様である。情緒においては氣質、意志においては性格という言葉によつて個人相互の差異が認められている。反応の速度と強度との差によって多血質・胆汁質・憂うつ質・粘液質によつて強い性格弱い性格の区分がなされているが、その何れにおいても、氣質的なものもしくは性格的なものを部分に分析し、その部分について数量的な差異を求めていることは、知能指数における場合と同様である。

従つてまた、たとえ氣質・性格においてより劣っているという個人差が見出されても、それによつて氣質・性格において個性的なものが否定されるべきでないことも明らかである。

否、人間の心的能力を知情意に区分して、その各々について比較考量することは、抑々その子ども全体の固有の個性を見失わせることではなからうか。我々は常に知情意等の人

間の諸能力が、その子ども固有の統一的な独自の構造において位置づけられることにより、固有のニュアンスをもった働きを営むことに注意しなくてはならない。このように考えるとき、絵の上手な子どもを保育要領が直ちに個性的なものと考へている如きは、如何なる場合に正しいであろうか。もしそれが、

単にクレパスを上手に用いるという技能的なものにおいて考へられてのものであれば、それは余りにも部分的である。勿論クレパスをもつことができないならば絵を上手にかくことはできない。然し、子どもの描画活動においてよいと考へられるものは、絵本の絵を型通りに模写する技能をもっていることではなくて、むしろその子どもが心に感じたものをありのままに表現できることにあることは周知の如くである。表現できるためには豊かに心に感ずることができねばならない。従つて豊かな感受性によつてその子どもが統一されていられるか否かが最も重要である。社会的態度にも自然の観察にも、音楽リズムにもその他その子どもの凡ゆる能力の発現において、ル

ッソーが自らを告白して、「私は考える前にまず感ずる」といつているが如き感受性が豊かに感ぜられるか否か。もしこうした全体的な理解において、そうした統一的なものを知ることができるとすれば、始めてその絵の上手な子どもを、個性的なものをもつということができる。

(未完)

(64頁より) しばらくするとケロリと忘れてしまい、おなじことをいつまでも根気よくくしている教師を野暮な流行おくれのようと思うくせがある。しかし、このようなわが国の流行からいえば知能検査は二、三年前にくらべて軽んじられているといえる。

また、本年(昭和三十一年)知能検査をおこなった五十の幼稚園で、検査を施行する理由をしらべたところ、二十九校から解答を得たがそのうち十四の幼稚園(四十八パーセント)が指導要録に記入するために施行したと解答しており、それ以上の理由を示していない。また、東京都内では入学テストのための練習として知能検査をおこなう幼稚園も若干あった。

知 能 の 診 断

(中)

村 山 貞 雄

6 生活行動の観察

教育相談で、知能指数が百五十以上の幼児にであうことがまれにあるが、これらの子どもは、みるからにしっかりしたかしこそうな顔をしていることが多い。しかし、よく注意してみると、顔というよりも、室に入ってきたときの一瞬の目のくばり、坐ったときの一瞬の身体のこなしというようなものに、かじこさがにじみ出ているといえる。これに反して、粘液性白痴は、行動がにぶくて、おちつきがない。

このように、子どもの一瞬の身のこなしにも知能診断の資料が得られるものである。

さらに、日常生活はいろいろな問題解決の連続であるので、幼児が問題を解決する態度を注意ぶかく観察することによって、知能の診断をかなり正しくおこなうことができる。

実際に、大部分の両親と教師は幼児の知能を、日常生活にあらわれる幼児の行動から判断して、その結果を利用している。

母親が幼児の日常生活から知能を判断するために使ったおもな内容を調査したところ、つぎのようなものがあつた。

- 一、ものごとをよく記憶しているかどうか
 - 二、絵本をみるのが好きかどうか。また読んでくれとよくいうかどうか。
 - 三、知識欲が強いのか。こちらがいうことを一生懸命におぼえようとするかどうか。
 - 四、ものごとをやりかけたり、何か言いかけたるとき、途中であやまっていることに気がつくか。そして、まちがった部分を正しくやり直したり、言い直したりするか。
 - 五、写真の中の人物を早くあてるかどうか
 - 六、おもちゃなどをならべるとき、さかさまにならべたりしなかったかどうか。
 - 七、AかBかというようなきき方をすると無意識にBと答えるか、またはどちらか考えて答えるか。
 - 八、習ったことに応用がきくかどうか。
 - 九、近所の子どもとよく遊ぶかどうか。
 - 十、よく気がつくかどうか。
 - 十一、ごく小さいとき、よく真似をしたかどうか。
 - 十二、おちついていっているかどうか。
 - 十三、動作が要領を得ているかどうか。
- このように、幼児の日常のいろいろの内容

を観察することによって、知能程度を五段階か六段階に診断することができる。

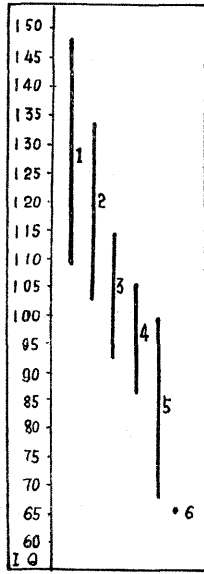
診断の内容は、大体つぎの言葉にまとめられるであろう。

一、知能が非常に高い、二、知能が高いほうである、三、普通の知能である、四、知能が低いほうである、五、知能が非常に低い、六、知能が薄弱である。

いま、この六つの分類にしたがって、幼稚園二つと保育所の七十人の幼児（ただしひとり子のみ）について、母親の観察結果と知能指数をくらべてみたところ、つぎのようであった。（この調査における母親の二十四％が専門以上率、五十六％が女学校卒、二十％が小学卒）

知能段階	人数	知能指数
一 知能が非常に高い	5	146
二 知能が高いほうである	19	134
三 普通の知能である	17	115
四 知能が低いほうである	12	105
五 知能が非常に低い	7	98
六 知能が薄弱である	1	67
七 七よく分らない	9	64

この表でわかるように、約一割あまりは、「よく分らない」といっており、解答したもので、つぎの図でみられように、重複しているところがあり、その信頼の程度は高くない。しかし、一段階とんで誤った診断（知能検査の結果を正しいとしたばあいの誤った診断）をした者は八名にすぎない。また、各段階を知能指数百三十、百十五、九十、六十五で五段階（最後二段階をひっつけて）に区切ると、段階の外に診断した母親は十九名（三十一％）であった。



以上の結果、過半数の母親は、すでに子どもを育てた経験がないばあいでも、子どもの生活行動を観察した結果、六段階か五段階程度であれば知能を診断することが可能であることがわかる。

しかし、小数ではあるが、観察結果だけでは大きなまちがいを生じることがある。愛育研究所で筆者が体験した例を示すと、つぎのようなものがある。

A 家庭における父親の誤診の例

東京都江戸川区の深沢晴光（満五歳六か月）は、親父につれられ、教養相談にやってきた。

知能検査をした結果、晴光の知能指数が約七十であることを父親に告げ、約七十以下を精神薄弱児ということを教えた。ところが、

父親は、晴光はしつけの相談でここにつれた来たのであって、晴光の日常の行動からみて、その知能は普通（むしろ普通以上）だと思っていたと語り、もし晴光がそれなら、彼といつでも遊んでいる同じぐらいの年齢の近所の子（六人ほどいる）は皆精神薄弱児にちがいないことになる、すなわち晴光と近所の子どもが遊んでいるところをみるのに、彼が一番かしこそうか二番目ぐらいであるから、一回遊んでいるところをみに来てほしいということであった。（昭和二十六年）

年)

B 家庭における母親の誤診の例

陳氏の子どもは二人兄弟である。母親が弟の広雄(生活年齢四歳八か月)をつれて教育相談に来たので、知能検査をした結果、知能年齢五歳〇か月で、知能指数百七であった。

このことを母親に告げたところ、母親(兵庫県立第二高女卒)は、意外の顔をし、この子は、日常の生活からみて、兄よりも知能が大分高いと思っていたのに、このような知能検査の結果がでたのは不審であるという。そこで昨年教育相談にやって来た兄正雄(現在満六歳十か月で、東京都内の某私立小学校一年生に在学)の幼児期に來所したときのカルテをしらべたところ、知能指数が百二十九であった。

母親に、弟のほうが高いと思った理由をたずねたところ、日常の態度をみるに、ものごとをよく観察するという理由をあげていた。

(昭和三十一年)

C 両親の誤診の例

丸田礼夫(三歳六か月十五日)の父親は東京大学を出ており、母親は都立高女を出ている。礼夫は、始歩期は一歳七か月で、始語期

は普通(一歳三か月)であるが、定首期は、頭がとて大きかったために普通より少しおくれた。(母親の記憶による。)

両親は、礼夫を千代田区の番町幼稚園に留就園させたく思つて來所したのであるが、筆者がその子を一見するや、眼より上部が小さく、一見おとなのような顔をしており、小頭症のうたがいがあつた。頭部は横にやや広いが、うしろ頭は絶壁をなしてうすく、指の先は扁平で指紋が非常にうすかつた。知能検査(愛育会式)の結果は、発達年齢一歳十か月八日で、発達指数五十五であつた。

両親に知能指数を告げ、礼夫の知能がひどいことを話したが、母親はどこまでも礼夫の知能が高いと思つており、父親は約三十分にあたる相談の最後のほうでやっと気がつきかけたようであつたが、これもはっきりしなかつた。たとえば、「ご親戚に変わったかたはありませんか」とたずねると、「それはどういうことですか」と聞きなれるような調子で、自分の子どもの知能を高いと思ひこんでいた。両親が礼夫の知能が高いと思つている理由として、たとえば、(一)日常の生活が非常にきちようめんで、くつでも反対にはかない、

(二)手についた泥をはらう、(三)小さいときから自分でものを考える、(たとへば、中にもが入つた、い、こをあたえ、それから、中にもが入つていない、い、こをあたえると、下思義に思つて自分で考えているようである)(四)歌の節を早くおぼえる(文句はいわぬ)(五)よその子どもとけんかしても、ぶつたりしない、(六)三か月前から「ママ、電車、通つた」というような三語文が言えるようになった(テニオハはまだ入らない)など、いろいろの理由をあげている。(昭和三十一年)

D 幼稚園における誤診の例

東京都〇〇区の山の手の幼稚園の園長から電話がかかつて来て、「新庄卓一は知能が低く、精神薄弱児でないかと思われるが、両親が慶応の幼稚園をうけさせたいといふので、思いとどまるようにいつてきかせたところ、どうしても一応うけさせたいといふので、先生のところに行かされたから、あきらめさせてほしい」ということであつた。

問もなく、両親と姉に連れられて卓一がやつて来たが、知能検査の結果、知能指数は百三十二であつた。

そこで、相談する前に園長に電話をかけて、

知能指数が高かったことを話したところ、園長は、困ってしまい、結局、「幼稚園における卓一の態度をみるに、皆よりも行動がのろく、遊戯も緩慢である。そのうえ、引っ込み思案であるためか、幼稚園の先生は皆彼を精神薄弱児でないかと思っている。このように彼は、態度がボソツとしており、社会性がなから、幼稚舎をうけるのであったら、性格もたいせつであるので、知能は高くても、今後、態度、性格に気をつけて指導するように、またそういう面で幼稚園の先生が受験をとめたのも無理がない」というように言ってもらえたらありがたい」ということであった。(昭和二十七年)

以上の四つの例でもわかるように、行動の観察だけでは、往々知能をまちがって判断することがある。

特に、(一)長子のばあい、(二)両親の要求水準が高いばあい、(三)幼児がおしやべりのばあい、(四)幼児が超内向的であったり、無口であるばあい、(五)両親が非常に主観的感情的な性質のばあい、(六)両親が非社交的なばあい、(七)幼児が何かのおけいごとで上達しているばあい、(八)幼児が環境によって、

ませているばあい、(九)幼児が非常に器用または不器用なばあい、などはまちがいがやすい。

7 知能の生理的な診断

医学的な知能診断の方法として、気脳法があり、脳波も間接的に有効である。

A 気脳法

気脳法(側脳室像映法ともいう)とは、空気、酸素、窒素、炭酸ガスなどのガスを頭部に注入して、脳室内にある液とガスをおきかえることによって、脳の状態を知ろうとする方法であり、普通に用いられるものは空気である。

そのやり方は、腰椎穿刺に二道路活栓をそなえた装置でおこなうのが普通であるが、注射針でガスを注入してもできる。

このようにして、気脳法により、まず側脳室を撮影して、側脳室が大きくなっているかどうかをしらべることができると、この結果脳水腫は、先天的と後天的をとわらず、診断が確定する。また、脳腫瘍も診断できる。

また、脳性小児麻痺は、先天性後天性ともに、側脳室が拡張していることがあるので、気脳法は脳性小児麻痺の診断の一助となる。

つぎに、側脳室が拡大しているばあいは、それに対応して、脳の実質がうすくなるから、このことから精神薄弱を診断することができる。すなわち、ガス体が脳の実質に入ると、萎縮があるばあいは、空気がよく入るので写真をうつすと、その線がはっきり出ている。

脳が萎縮しているばあい、知能の発達が望まれない。すなわち、将来の知的発達が可能かどうかしらべするために気脳法が大いに役立ち、この面ではつぎに述べる知能検査よりも決定的な診断をくだすことが可能である。

また、気脳法によって、脳の畸型をみだすことができる。たとえば、けいれん(乳児の癲癇性けいれんは知能を非常に低下させる)を頻発している乳児で、気脳法により畸型のあな(脳穿孔)をとおって、ガス体が頭蓋の下に出ていることがある。

また、大脳皮質にカルシウムが沈着すると、スタージ・ウェーバー氏病といって、原因不明の癲癇をおこすことがあるが、その発見も気脳法で可能である。ただし、これは単純撮影でもできる。

B 脳波

近時、脳から得られる週期的な電氣的变化を記録して、脳の生理を考察する方法が発達してきた。

脳波によって知能程度の測定ができないかということとは、クリーザ (Kreizer G.) その他の人々によってしばしば考えられたが、現在、一般の知能程度の診断はもとより、白痴診断も困難である。

すなわち、白痴児の脳波に特徴のあることを述べた研究もあるが、多くの研究はむしろ特徴のないことを証明してゐる。

ただし、モンゴリスムス (Mongolismus) は、他の精神薄弱児にくらべると、徐波や振幅の大きい速波などの異常波をだすことが比較的多く、前述のクリーザは、モンゴリスムスの脳波の異常の程度と知能の程度は平行するといふ。しかし、先月号で述べたようにモンゴリスムスは容貌によつても診断できるので、特にこの方法が知能の診断に有効であるといふわけではない。

なお、精神薄弱児のなかには、異常波をだす者を多くみうけるが、これは、たとえば、癲癇などのように、知能低下の原因になつた障碍があらわれる結果である。

脳波は特に癲癇の診断に非常に有効であり、スパイクが証明されるものは癲癇であることが多い。癲癇は長くつづくとかならず知能がひくくなる。また、非常にねちねちしており、非常に几帳面であるなど、性格異常があらわれるが、この性格異常もまた知能の実際のはたらしをにぶくすることがある。また授業中や知能検査のときに、短時間ボーッとしている児童があるが、このような子どもを脳波によって癲癇であることを発見して治療することが可能である。

C その他

その他の医学的な方法として、容貌の異常特に頭部や眼の異常による方法や、生理的な生育暦による方法があるが、これはすでに述べたところである。

以上述べた知能の生理的診断法は、知能障碍をみるものであつて、普通や普通以上の知能の者を見るのでできないが、つぎに述べた知能検査による方法は、天才級の知能まで測定しようとするものであり、知能診断の王座を占めてゐる。

8 知能検査の地位

知能検査が知能診断において占める地位は現在非常に高い。

千九百五年にビネーが一般知能の診断を考へるまでは、もつと感覺的能力因子的な内容の検査が考えられていたが、これらの検査が知能診断にたいして占める地位は高くなかつた。また、わが国では、終戦前はその地位は高くなかつたが、戦後アメリカ流の教育がさかんになるにつれて、知能検査がさかんになつた。

現在、性格検査その他の検査が、性格その他の診断にたいして占める地位にくらべると、知能検査が知能診断にたいして占める地位は非常に高い。

たとえば、学会の研究発表などでも、研究の要素として幼児の知能程度が考えられているばあい、知能検査をおこなつていないものは、問題にならぬほどに考えられている。

しかし、現行の幼児におこなえる知能検査には、欠点や難点が考えられないわけではない。

そのおもなものとして、

一、標準化調査の不完全なことにより、知能値にバイアスのあること(たとえば標準化

が、不明また都市偏重の検査が多い。)

二、測定の内容の理論的うらづけが不十分であること、また内容に、不満足のものが多いこと。(たとえば都会生活で経験する知識が問題の内容に多いものがある。)

三、施行の技術が、幼稚園や保育所の教職員にやや困難なこと。

四、子どもの自然性をとらえにくく、検査時の条件によって差が生じること。(たとえば言語検査において情緒や社会性の発達が不十分な幼児にこの弊害が多い。)

五、言葉によって教示するばあい、テストによって差が生じる危険があること。また採点法に曖昧なものがあり、主観によって採点結果が変化するおそれがあること。

六、練習効果のあがる内容が比較的多い。などがあげられる。

調査の結果、以上の項目のうち、二は学者が、三と四は幼稚園保育所の先生が、五と六は児童相談所のテストが、主として主張している。

以上のような欠点があるにもかかわらず、知能検査の重要性にたいする認識は、現在高上しつつあるようである。

その理由として、つぎの内容があげられる
(一) 近時児童相談や心理療法がさかんになってきたが、その基礎として知能検査の重要性が認識されてきたこと。

(二) 自由募集の小学校の入学試験や入園試験に、知能テストが使われること。(就学、就園試験は昭和二十七年頃からさかんになった)
(三) 指導要録に知能検査の結果を記録する欄があること。

(四) 近時特殊教育が問題にされはじめたが精神薄弱児の発見や診断に知能検査がたいせつなこと。

ただし、現在知能検査ブームは過ぎたという人がある。また形式的にテストをしたり、まちがった意味でテストを使っている者も少なくない。たとえば、先生から「もう知能検査は下火ではないのですか」というような言葉を、現在時折きくことがある。この言葉は、わが国の学校の教師が明治以来もった流行を追う軽薄な心理の一端をあらわすものである。すなわち、教育のなかに一種の流行があり、教師のうちのある人々は、一つの流行にたいして、熱にうかされたように大さわざするが、

(58頁につづく)

幼児の教育

第五十五卷第十一号

定価五十円

昭和三十一年十月二十五日印刷

昭和三十一年十一月 一 日

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願ひ致します。